

64-264



1200501278140

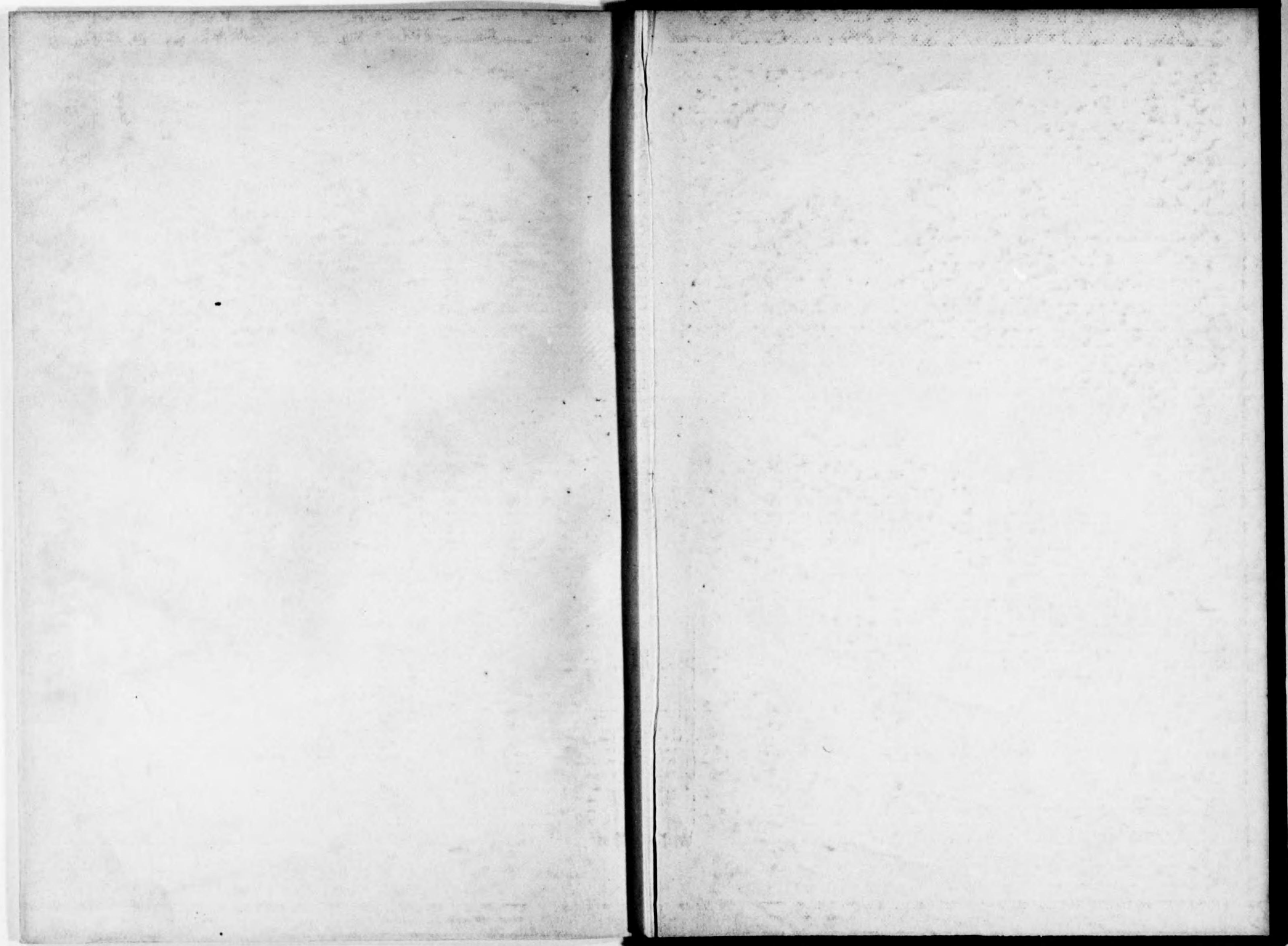
64

264



始







長崎

敬衛記錄





例言

一、本書には福岡藩士井上權一郎が長崎祇役中の手留(一)弘化二年乙巳二番々日記即ち同年夏英吉利船入港當時警衛の記録と(二)嘉永六年魯西亞船渡來増人數被差越記即ち嘉永六年丑一番々之末魯西亞船渡來二番々其外増人數被指越候節記録」と題せるもの(三)安政元年甲寅紅毛船渡來之記即ち嘉永七年甲寅閏七月に紅毛蒸氣船渡來に付急速被差越置候内イキリス船四艘致渡來候節之記」と題するもの凡て三部を收む。記事頗る瑣細に亘れるものあれども當時異國船渡來に際し長

64-264

い 4

崎港警衛の状を知るに足る貴重の文献となす。

一、福岡藩の長崎警衛に就きしは、是時に始まりしにあらず、由來する所頗る遠しとなす、茲に其沿革を略述して本書を讀む人の参考に資し置くべし。

島原の亂後徳川幕府は鎖國の制を建て平戸の貿易場を閉してたゞに同國長崎の一港を以て本邦唯一の開港場となし寛永十八年二月筑前五十二萬石を領せる福岡藩主黒田家に對して當年の參觀を免して長崎警備に當らしめ請を許して大阪に藏する石火矢筒彈藥を交付しその充實を計らしめ翌十九年更に佐賀藩主鍋島家に之と同様の令を出し以來一年交代を以て此事を專當せしむ。時に變遷ありしも此制明治元年に至る約二百年間存続せり。抑も福岡藩の此事に當る閩藩一箇の信念ありき、藩祖黒田長政の遺言に筑前就封の理由を述べて『四國筋に

て兩國も可被下哉又筑前にて一國可被下哉内存御尋候、我等申上は兩國は可奉望事に候へども如此天下平均に被成候間日本國中に於て家康公に敵し背き申者あるべからず指たる御奉行可申時節ある間敷く筑前は大唐之渡口にて殊に探題所にて候へは他の國兩國にも増申と存候大唐の御先手と思召筑前を被下候はゞ可爲本望由申上候』云々と今長崎警衛の任に當る將に藩祖の遺意を繼承するものと云ふべし。此を以て藩は先づ戸町西泊の番所を建て其全力を擧げて警衛の充實を計れり其任務の主たるは長崎港沿岸并諸島にある石火矢臺の守衛なりき、明暦元年春太田尾、女神、神崎、高銚、白崎、長刀岩、陰ノ尾の石火矢臺竣工す。松浦肥前守の奉命せし所、次で文化五年英船出島蘭館乗取の暴舉に懲り新規臺場の築造に精進しヌ、レ、神崎、女神、高銚、陰ノ尾の新規石火矢臺文化六年六月成功す。其内前三臺は福岡藩、後の二臺は佐賀藩並に其の築造を擔任する所なりき。更に増臺場の議起り文化九年七月

竣工す、高鋒二臺、長刀岩四臺、神崎三臺、魚見岳三臺、前者六臺は鍋島家に
て後者六臺は黒田家にて造營に當れり、而して太田尾、ス、レ、女神、神崎
魚見岳を當番受持とし、白崎、高鋒、長刀岩、蔭ノ尾を非番受持とす。幕末に
於ける福岡藩定例の長崎警衛一ケ年間は藩士を四番に案配して、長崎
に番立を命ず、一隊約三ヶ月滞崎して、次の隊と交代し、當番の石火矢臺
を守衛し、その佐賀藩との交代は大抵三、四月の頃なり。藩主亦在國中、四
度長崎に越坐して巡視す。非番の年と雖異國船豫期せざるに來航する
あれば藩士隊を編して急ぎ長崎に到り、所謂非番石火矢臺の警備に就
くを例とす。其の當番の年費す所の藩費約五萬石と推定せらる。

一、本書刊行に際し、黒田侯爵家がその所藏の臺本を貸與
せられて、其刊行を認可せられ、且權一郎の實弟故山中
立木氏亦本書の刊行を許されしを感謝す。

昭和七年六月

日本史籍協會

長崎警衛記録 全

目次

一 弘化二年乙巳二番々日記 自弘化二年四月九日
至同年十一月十日

一頁

嘉永六年癸丑

一 魯西亞船渡來增人數被差越記 自嘉永六年六月朔日
至同年十一月十七日

一二一

嘉永七年甲寅閏七月より

一 紅毛船渡來之記 自安政元年三月朔日
至同年八月廿三日

紅毛蒸氣船渡來に付急速被指越置候
内イキリス船四艘致渡來候節之記

三三一

番々日記

井上權一郎信元



各事相達儀有之候條明後十一日四ツ時 御館役所に可被罷出候以上
 四月九日

○同十一日大頭役所に致出方候處河村の左之趣被相達候事
 貳番々被指越候に付爲心得相達置候様御月番又之進殿被仰聞候事
 一御軍事御改正に別帳御定書之通に相成脊旗切御渡相成候に付同役
 中申合一同に博多東町茜屋の染方之儀兼申付置候分致出來候に付
 四月十五日取に行染代六錢九匁外に縫立糸半かせ染代拾文相渡候事

○四月十八日去年長崎表紅毛本國船就渡來急速被指越候節之爲御稱譽當春御目錄頂戴之分を以小筒荒地張立之儀一鬼正次郎へ申付今日地板鍛立候に付見物に行候事

○同廿日右之分卷立へ上致候に付見物に行候事

○同廿二日右之分ならし上に付右同斷

○同廿三日右火床措子等入毎事添候に付直に銃工一鬼道左衛門致持參先力様迄之外頼置是亦拜領金之内壹歩相渡置候事

○五月三日唐人町八百屋助六方に行兼る實父を以銀主之義及相談置候末致嘶合銀主と申候は請持不得候得共當月の月々貳歩宛可貸遣長崎留守中之儀致安心候様之旨相答候事

○同廿日河村五太夫方々二番々同役中の左之通り達來

各事長崎貳番々内用意被 仰付置候通彌被指越候旨今日御月番三左

衛門殿被仰聞候尤六月廿二日乘船之筈に候其心得可有之候以上

五月廿日

尙以左之面々今日御呼出に長崎貳番々御石火矢役代として被指越旨御月番被仰聞候此段爲心得申入候以上

津田茂太夫

飯永市兵衛

東郷半之丞

○同廿三日河村方左之通持廻に達來

長崎貳番々御番手名付御用所指出置候條米銀證據勝手次第仕出御受取可有之候且又先荷物品付目錄來る廿九日銀拙者手許に可被差出候御船積日限は追可相達候以上

五月廿二日

○五月廿四日河村へ左之通先荷差出致置候事

先荷指出

- 一五ツは 米箱
- 一六俵は 石炭
- 一三ツは 漬物桶
- 一壹からけは こも包
- 一壹からけは 桶類
- 五口

弘化二年五月

井上権一郎花押

河村五太夫殿

○同日御勘定所行諸證據大賀俊藏に頼置

○同日河村左之通達來

各事於長崎詰合御臺場諸持割可申談候條明後廿六日四ツ時役所可張出候以上

五月廿四日

○同廿六日大頭役所被致出方候處河村五太夫方詰合書付左之通り申談

西泊

吉田市六

原田助太夫

安川兵太夫

根中藤藏

井上幸左衛門

大森圓太夫

久佐彈兵衛

井上権一郎

末田喜太夫

伴次郎左衛門

東郷嘉左衛門

太田尾

神崎

長刀岩

六

櫻井伊平

東郷平之丞

魚見岳

野間又六

杉傳兵衛

高鉾

桑原彌七郎

安部孫太夫

陰尾

飯永貞助

早川利太夫

御臺場々々請持右之通

津田茂太夫

○五月廿七日左之通河村々達來

飯永市兵衛

長崎貳番々先荷船出船依御都合來月十日出船被 仰付筈に付八日比
々荷物積方に可相成候條其心得可有之候例と違前廣之出船に付此段
相達候以上

五月廿六日

○六月朔日諸證據相濟候分大賀俊藏持參請取候事

○同日波奈の先例に遣候石炭鹽等求に行歸加瀬丈七方の諸證據持參御
銀金に引替之義頼置米證據は中師仁右衛門の左之書付添頼置候事

覺

一米六俵三斗六合

一同四俵壹斗九升九合

拾壹俵壹斗七升七合

内

四俵は 加瀬丈七方の持込

四俵は 八百屋助六方の持込

三俵壹斗七升七合は 井上權一郎方の

○同五日家頼召連加瀬丈七方へ行先荷之米四俵箱詰預置候事

○同七日先荷船八幡丸乗船加茂丸何れも手明問合に來

○同日後濱町日出方之上兼之張立居候荒地致力様候處炭籠りか大へげ出
る

一左之通河村の達來

當貳番々各先荷物別帳日割之通致御船積候旨御船奉行の申出候間同
日朝五ツ時を九ツ時迄之間荒戸柱倉前の持出御船方へ可被爲渡候尤
爲受取方無禮船頭兩人同所に罷出居候條同方引合御船積可有之候以
上

六月六日

八幡丸 六月九日積

井上權一郎荷船

梶取

末田喜太夫同

城戸勝助

其餘略す

○六月九日家頼の申付先荷積爲致候事目錄左之通相渡候事

先荷目錄

一四ツは 米箱

一七俵は 石炭

一二ツは 漬物桶 一ツは火かき

一壹からは 火鉢

炭とり
のりこし

一壹ツは

油入樽

名印判

八幡丸梶取城戸勝助殿

○同日一鬼道左衛門悻彌太夫來荒地力様致し候分相渡雖通し候上にも評
 義いたすべく申談置候事尤力様別條無候は、今日半代銀相渡筈候得共
 今日限りに金貳朱入用之由申候に付則遣し候是迄貳步貳朱に相成
 一家來源八の今日壹步貸是迄都合貳步相渡給金は六錢百目極
 ○六月十一日早川又一郎方の行具足之下著拵候に付致相談候事
 ○同十二日早朝御切紙到來長崎貳番々被指越候に付明後十三日 御目見
 の被 仰付御料理をも頂戴被 仰付候旨御月番彦兵衛殿被仰聞候旨河
 村の達來且上下著用前御禮之儀も例之通書加有之事
 一左之通河村の御番手中の當廻達來候事

長崎貳番々中白帆相達候節御手當定書一冊并御船組帳共指廻候條可
 被得其意候尤事長き義に付銘々入用之廉々被書被致先々早々被指廻
 留りの拙者手許に可被指返候以上

六月六日

一朝飯後爲前御禮惣詰の出方御帳の名許相記置候事

○同十三日左之通五太夫方の御番手中の廻達來

別帳四冊相達候條被得其意早々被指廻來十四日限留の可被指返候以
 上

六月六日

壹冊は 送り立御船組

壹冊は 住居割

壹冊は 火災之節出方割 略不寫

壹冊は 於浦津心得書 同

於長崎平日住居割 但御臺場々々詰分は前に有之故略す

西泊

聞次木屋

中ノ木屋

加番木屋

下ノ段木屋

一番船

二番船

三番船

喜多村嘉兵衛

久勢與一郎

木山彈兵衛

三隅藤兵衛

吉田市六

原田助太夫

伊藤庄左衛門

松本市郎左衛門

白杵佐太夫

梅野團之丞

四番船

五番船

四十二丁立

四十六丁立

五十丁立

三十八丁立

戸町

一番木屋

二番木屋

木立藤次

因源七

林榮次郎

山崎平太夫

藤澤養壽

大原千吉

上田佐平

空船

浦上善之進

八木鞆負

原茂助

三番木屋
 一番船
 二番船
 三番船
 四番船
 五番船
 四十六丁立
 四十六丁立
 四十六丁立
 三十八丁立

梶原七十郎
 山内助左衛門
 有村卯兵衛
 榎千之丞
 堀仙左衛門
 坂口和三郎
 浅香了藏
 空船
 磯山幸助
 高橋良吉
 空船
 空船

長崎二番々送り立御船組

鴻毛丸
 一五十六挺立 月成權太夫
 方圓丸
 一五十挺立 蒔田權右衛門
 大新造丸
 一五十挺立 河村五太夫
 一五十挺立 大野十郎太夫
 好風丸

御船頭上 田佐平
 梶取鹽川 長次
 御船頭磯山 幸助
 梶取池 正吉
 御船頭大原 千吉
 梶取栗山 壽一
 御船頭高橋 良吉
 梶取立花 清作

一三十六挺立 大組 伊藤庄左衛門

梶取荻野李左衛門

柳丸

一三十六挺立 同 山内助左衛門

同 菅 長次

快風丸

一二十二挺立 御目付 有村卯兵衛

同 本城久兵衛

多幸丸

一五十六挺立

御足輕頭 浦上善之進

同 喜多村嘉兵衛

同 原 茂助

同 八木 靱負

同 各務與一郎

同 梶原七十郎

御石火矢役頭取 吉田 市六

萬歳丸

一四十六挺立

御石火矢役頭取 原田助太夫

御醫師 藤澤 養壽

御足輕 梶取吉田 勝次

御足輕頭 木山 彈兵衛

同 三隅 藤兵衛

御石火矢役 安川 兵太夫

同 大森 圓太夫

御足輕 梶取大塚 代作

御石火矢役 安部 孫太夫

伴 次郎左衛門

早川 利太夫

加徳丸

一五十六挺立

加茂丸

一五十挺立

御石火矢役

梶取中野 太六

久佐彈兵衛

杉 傳兵衛

野間 又六

井上幸右衛門

飯 永 貞 助

轟 德 太 夫

東郷嘉左衛門

櫻 井 伊 平

津田茂太夫

飯永市兵衛

東郷平之丞

一五十石小早

御船奉行

根 中 藤 藏

井上權一郎

桑原彌七郎

末田喜太夫

松本市郎左衛門

梶取吉本茂八

韋駄天丸

一五十挺立

梶取入江仁作

臼杵佐太夫

木立藤次

横 千之丞

坂口和三郎

一三三 往來船中番頭中用船

因 源 七
堀 仙右衛門
林 榮次郎
淺 香了藏
山崎平太夫
梅野團之丞

一急用丸 中老用船

梶取前田 徳助
舟付喜 平次

一六挺小早

同

御船數十六艘

一紙檜炭拜借之儀例之通引合相濟居候間勝手次第拜借致候様吉田市六
方廻狀來

一左之書付爲心得大頭方被相達候

覺

一當二番々乗船例之御番方比合早候に付二番々致著崎候迄自然阿蘭陀
船入津無之御番所交代之當日に至白帆之注進有之候節は御茶屋渡海
以前に候は、一番々方引請渡海以後に候は、二番々方引受候様に交
代之都合申合候事

一貳番々御船々著崎御番所下へ乗込明日之交代申合候節前件之注進有
之候は、御船々繫船之儘船列相立船飾いたし番頭初銘々乗船へ罷在
自然事變候趣に候は、増人數御定之通に申合候事

一右同著崎に臨蘭船入津之模様にも未だ湊内へ挽入無之時節に候は、
神崎邊に御船に繰込船飾等いたし挽入之上御番所下へ乗込候様申合
に候事

但例之商賣船にも全く挽入遅々いたし候模様には、御番所へ問

合候上時宜に依ては御番所下へ乗込候儀も可有之哉に候得共御番所にも繁雜之折柄に付事々定例之手数相濟候上例之通御番所下へ乗込候方可然と申合候事

一四ツ半過御番手中に

御目渡御月番彦兵衛殿を於長崎番頭中得指圖入念可相勤旨
御意之趣被仰達候事

一九ツ半比を御料理頂戴例之通御廣間也御用人を御挨拶有之頂戴相濟御弓之間に而薄茶頂戴有之五人計つゝ罷出御料理左之通

御鯰

うり

御汁

つみきりかまほこ

香物

淺漬

御平

丸牛へん
葛かけ
卸生か

御飯

一番肴 牛へん

御吸物

のり

御菓子

のし饅頭

右御禮は例之通惣詰御帳に名元相記候事

一紙役所へ家頼遣拜借致候事

○六月十五日高挑燈馬乗騎馬共紋付油引等相仕舞

○同十七日荷物入組いたし候事

弘化二年巳六月十六日長崎立之大早十八日に著薩州聞役を此方様聞役
に爲知之寫左之通十八日明石助九郎宅に往合せ寫之

去月十五日琉球國那覇川口の異國船一艘渡來卸碇候に付役々被指越
相尋候處異國人は言語文字不通唐人一人乗組居啖咭喇國之船に而
人數二百人乗組當四月廣東より呂宋に指越八重山島にも罷渡夫を琉

球に來著いたし候段申出本船石火矢等乗付有之候得共兵船之様子には不相見然處佛蘭西國之船渡來之義承居候由に相尋候に付去年三月來著佛朗西人一人唐人一人殘置本船致出帆候義共追々御届申上置候通之成行相答候處當七月暎國之船今一艘來著可有之野菜等所望候は、相達吳候様申出候に付何様之義に可致渡來哉と承り候得は方々渡海之中途汐掛に何ぞ子細は無之旨申出尤任望食料相與候處是を如日本渡海地方致見分候段承り候に付日本は何つ方へ參候哉と相尋候處此儀は取極さる段申置同十七日亥子の方に向致出帆候右に付亦は八重山島にも爲致來著筋に候得共遠海故未何分不申越且滯留中締方嚴重に申付候段琉球を飛船被仕立申越候尤日本へ可罷渡旨申出候に付亦領内浦々取締申付候右之趣今日伊澤美作守様は御届仕置候事

巳ノ六月

- 同十八日河村が明後日御謁之義達來候事
- 同廿日四ツ比御館出方跡聞指出は同役一紙連名に御指出御扶持方證據も引替九ツ比御月番彦兵衛殿は謁候事
- 同廿一日早朝を荷からけ無程加茂丸を荷物取に來る
- 同廿二日四ツ半比出立久佐は誘引九ツ過波止場致乗船届例之通連名に亦河村は相届七ツ半比座直入夜模様悪く五ツ半比波止内は漕戻
- 同廿三日六ツ半比波止出船北東風七ツ比粟生著船入夜夕立
- 同廿四日七ツ時比粟生出船四ツ過ほうき著夕五ツ比出船八ツ比面高著
- 同廿五日朝五ツ比面高出船西風八ツ比神島著船壹番々同役來八ツ半比神崎は揚る去る廿日紅毛船入津相濟居候に付例之通りに候事
- 一先番神崎詰小川彦助大西諸平梶原八兵衛を書付を以毎事申送有之今夕は新古同役六人共致相宿候事荷物等無別條請取
- 一夕河村が一番々同役中に左之通達來

明廿六日内交代之儀新古番頭中申合候條各事交代可有之候以上

六月廿五日

○同廿六日早朝一番々面荷積毎事請取渡濟無程乘船波止迄送候事

一晝後彈兵衛同船に先番大頭其外同役船は行夫は西泊へ渡海中老大頭

同役木屋へ行歸 天満宮參詣いたし候事

一貳番々先荷船去る廿五日廻著之由今日荷物積來無別條請取

一先番大組頭衣非茂左衛門大造之病氣に付二番々大組頭蒔田權右衛門去

る十四日御國許出立に交代に相成茂左衛門方も陸路を歸相成候に付

醫師多久玄臺付添權右衛門方乗船同十五日出船に廿五日著崎之由右

船は二番々醫師藤澤養壽罷越候に付此節船中は荻野道一爲用心被差越

一番々一同罷歸候事

一左之通河村は御當非同役中の達來

明廿七日權太夫於居木屋御壁書拜聞に付各自袴著用に五半時可被罷

出候尤當番之面々は右相濟被代合四ツ半時權右衛門居木屋は可被罷出候已上

一夕五ツ半比一番々衆神崎出船いたし候事

○同廿七日彈兵衛善太夫西泊渡海御壁書拜聞相濟歸船之上拙者戸町渡海

權右衛門方御木屋に御壁書拜聞尤白崎は魚見岳は出番中に付神崎は

暫時介番として彈兵衛渡海す拙者相船也

○六月廿八日御臺場内御石藏御道具木屋等相改別條無之候事

○同廿九日早朝河村五太夫方御臺場見分兼沖廻有之付廻左之面々

浦上善之進

喜多村嘉兵衛

吉田市六

原田助太夫

其外例之役々

一市六義當所の高鉾迄船貸吳候様申候に付當所付八挺に彈兵衛拙者も相船に高鉾の渡海す右は火矢筒一件なり夫を長刀岩陰尾にも渡海直に西泊へ行歸路山越へ太田尾へ行直に山越に神崎の歸

一神崎太田尾之間道已前は有之候得共近年通路無之故道不相分候處當壹番々踏分又々已前之通間道致出來候事

一左之通河村の御當非同役中の達來

各居木屋建具類枚數預書例之通來る七日限拙者手許へ可被指出候已上

○七月朔日先荷船三艘出船○七ツ比御越坐立御船に著晝比瓜立著

一先番の申出有損所爲繕大工職左官職瓦職來相届候事

○同二日西泊致渡海御當非御臺場々々々も渡海致し居候に付申合等いたす

一金鼓具其外御道具預書并建具類指出共一番々之分に奥繼致候は如何可有之哉申合五太夫方の申入候處其通に可然旨被申談候に付一番々之分に奥書致三通共に書判之處に申合今日相仕舞候事
一御筒手入之品々は迄は石火矢打頭取の役所へ申出請取居候得とも當一番々の相改同役の差出處々申合候旨先番の申送候に付左之通指出尤御越座も近寄候に付其手御當用之品々も書加置候事

覺

一辛子油 壹合

一砥粉 壹ツ半

一薪代 百三十文

一雜巾切 九ツ

右は御筒手入用

一空俵 五俵

一 御幕絞り緒 六筋

右は御越坐御手當入用

右御渡被下度候

七月

神崎詰 石 火 矢 役

損所指出

一三の増小番所所々朽損

七月

同 石 火 矢 役

覺

神崎水場及濁水候間水取船之儀御船奉行に御談被下度候

七月

一 御石藏土戸昨日御作事の手入致候分土厚く候るべり兼錠卸し難候間其段五太夫方の口上にて申出置候事

一 異船用諸御道具請取帳は已前々奥書にて相濟來候に付是亦今日相仕舞

一 五太夫方々海寇記略と申本寫方被相頼候に付今日紙共に持歸

○ 七月三日西泊開次足輕頭喜多村嘉兵衛損所見繕に來

一 地方大工山崎久左衛門と申者受負にて貳貫四百目壹目御筒覆新に仕立に來候事

一 御作事方々土戸べり兼候分手入に來候事

同日七ツ半比深堀之注進船吹貫振烈敷致通船候に付急用船を以て外聞爲致候處四十里程沖に事變り候船相見未た白帆共唐船共難見分今少致候は、旋と相分可申由相答候に付直に瀬戸乙名深堀儀太夫に急用船遣居候折柄同人致通船候に付聲掛相尋候處唐船と相見候旨相對候に付御臺場飾も用意之儘にて見合せ候内戸町は半は丈筋立候得共西泊其外御臺場々々は何たる模様も無之無程入夜候處深堀は夥敷挑灯等相見候に付如何之都合哉と相伺居候處四ツ半比御番所魚見岳へ御提灯燈立候に付

當所も御傍致候事

- 同四日未明公船等追々乗出折柄儀太夫又々通り掛候に付相尋候處今朝野母遠見に白帆相見候趣相答無程遠見々々に石火矢之相圖打有之一早朝根中藤藏其外御番所手傳御足輕追々渡海致來候事
- 一御番手粧束當御番を具足下陣羽織に相成候に付下著小袴脚半水足袋陣羽織陣笠に受持場所致出張候事
- 一五ツ半過檢使船并警固船等通船高鉾わく堂島ノ沖邊へ繫船に相成
- 一九ツ比伊王島の西北之沖神崎を見廻候得は瀬戸神崎之間を見ゆる異國船一艘帆に走り込八ッ比伊王島と高鉾之中央に碇入候事
- 一入夜風雨烈敷候得共交々御臺場廻り方石火矢打ゆるも申付候事
- 七月五日異船守衛は足輕頭四人組共異船之四方に繫船半日交代也
- 一大頭も高鉾の出張に相成本船其外船々共出張候事
- 一馬廻頭は長刀岩へ出張右同斷

○同六日高鉾の假木屋致出來

- 一白崎御臺場上ノ方々小鹿倉諫早深堀の陣取幕張等有之人數追々入込候模様候事

一大頭馬廻頭共御番所の引取に相成

一異船へ野菜材木等被下と相見の漕運候事其外被下物は終に記之

- 同七日吉田市六來申談候は、此節之異船はイキリス船之由廣東を呂宋へ來夫を朝鮮に行朝鮮を當所へ來候由廣東人二人乗込通詞いたし候由國王之命を受て諸州分見に廻り候處薪水乏敷相成候に付所望旁渡來之段申候由山手へも揚り分見致度趣相願候由に候得とも御許容無之併所望之品は少々御渡相成昨日追々積込明日は致出帆候と之事將又殿様彌去る五日御發駕に明日御著崎被遊御上陸は先神崎之處伺に相成居候に付多御上りに可相成大頭も繁雜之折柄に付市六を申談候様五太夫方の申談候と之事

一 佐嘉御人數廻著に付御非番所相渡候様御奉行所々御達有之候由に付長
 刀岩白崎二ヶ所相渡度最早明日出帆も致候都合に付右之處に於致承知
 候は、長刀岩之面々は蔭尾へ引越白崎は傳兵衛引拂候得は甚事少く候
 得共二ヶ所に於は佐嘉々承知致間敷左候得は長刀岩蔭尾詰之面々は魚
 見岳太田尾へ行高鉾詰之向は神崎に參候處に申合置候間其心得致居候
 様市六ヶ申談候事

一 諫早人數今日も追々廻著之模様なり同所々固候場所凡左之ヶ所也

神島 わく堂島 伊王島 香焼島 小鹿倉

一 深堀之人數は小鹿倉邊々深堀に掛幕張等相見候事

一 暮合御非番所渡立會之役々大頭初白崎へ出船に相成候事

一 夕九ッ比御非番所渡相濟八ッ過高鉾諸同役安部孫太夫早川利太夫津田
 茂太夫當所へ渡海在來侍番所へ居住石火矢打も來右之面々荷物は地方
 團兵衛船雇に相成四ッ比積來石火矢打之分は同く別船に於積來今夕八

ツ過大夕立也

○ 同八日曇天西風吹募波立殊之外強

一 左之通大頭々御番手中に達し來

イキリス船來津に付佐嘉が被指出候御人數相揃候由に於御非番所御
 臺場御同方い御引渡致候様御奉行所々依御指圖今日御引渡相成候
 右之通御引渡相成候共御番船は矢張從 此方様被指出事に候條彼是
 爲承知申入候已上

七月七日

一 五ッ半比イキリス船出帆いたし候事

一 八ッ半比檢使船引拂相成候事

一 諫早豊前沖見分と相見致通船候事

一 此節唐通詞共々指上候書付寫左之通

今日入津之白帆船乗組居候廣東人申口左に申上候



- 一本船之義はイキリス國仕出之由
- 一乗組貳百五十人 右之内廣東人
壹人乗組
- 一當六月比琉球國へ罷渡夫々朝鮮へ罷越候由
- 一本船仕出之義は諸國測量之ため國王を指遣候義に付御當地も爲測量
山手の上陸仕度申出候
- 一牛薪水油鶏等申受度由申出候

右之通荒増承り候次第申上候猶委細之儀は追々相尋可申上候已上
七月四日 唐通詞連名

一左之通河村を同役中に達來

尙以御巡見御剋限之儀は未だ不相分候條明早朝と心得可有之候以上
殿様當表爲 御越坐去る五日御國許 御發駕今八日大村を當所 御著
明九日兩御番所御臺場々々 御巡見被遊筈に付其心得可有之候尤イキ

リス船致出帆帆影見隠候後に相成候は、銘々請持筋其外共平常 御巡
見之通每事可被相心得候繁雜中之義委細不相達候間懸念之筋も有之候
は、拙者の可被及問合候此段相達候以上

七月八日 市六は神崎出方助太夫は戸町出方
御名代等打廻之義も達有之略す

尙以御巡見之節御往來共御臺場波止に可被罷出候且 御名代被爲越候
は、御臺場は同所詰石火矢打頭取并御道具受持之者を案内いたし候様
可被申談候已上

西泊御番所 戸町御番所 神崎御臺場

右御巡見

太田尾御臺場 すゝし御臺場

右御船中 御見流

魚見岳御臺場 女神御臺場

右御名代

一兼申申出置候御筒手入諸品其外共石火矢打頭取へ申談西泊の受取に遣手入等爲致候事

一西泊へ石火矢打頭取渡海之節市六の傳言に同役此節陸地を來居候面々之内五人程神崎の手筈に付三人は上ノ木や二人は侍番所へ高鉾を來候三人と同居いたし可然申談置候に付右之趣別段不申遣候旨申來
一夕月成權太夫方河村五太夫方連名に同役中の左之通達來

別紙

御意之趣各の可相達旨御供御用人吉田久太夫を相傳候條則相達候右は居木屋の呼出相達義に候得共今程繁雜中之義に付其儀無之候其旨可被相心得候已上

七月八日

別紙之寫

今度異國船渡來之趣 御承知被遊候に付吉田久太夫爲其從塚崎驛御先に被指越候兩御番所を初守衛方彌嚴重執計候様可申聞旨 御意に候事

一夕石火矢打を爲相知候はイキリス船致出帆候得共風故歟伊王島沖の碇

入仕候段瀬戸之者を當所付急用船之者に及噂候由に候事

一夜中御挑灯篝火昨夕之通に致候事

一御非番所佐嘉之方も同様に候事

一御足輕頭番船四艘共に今日も致繫船居候事

○七月九日御臺場飾等昨日飾立之儘御筒引出引綱掛火蓋置札其外木手子火指等も其儘にいたし置候事

一五ツ半比 殿様御出船四ツ比西泊御揚り被遊風雨烈敷相成候に付同所に暫時御見合之御模様夫々戸町女神御上陸九ツ比神崎邊迄御出被遊直に御引返御揚陸不被遊候間何も見合御辭儀申上候事波止出方左之通

安部孫太夫
 久佐彈兵衛
 根中藤藏
 早川利太夫
 井上權一郎
 末田喜太夫
 津田茂太夫

何れも具足下陣羽織之儘陣笠持參

一九ッ比沖出方之番船は足輕頭四艘共引拂候事

一御國許之急速陸路被指越候面々八日黄昏か今日迄に追々著崎致す

○七月十日陸路之著崎之同役當所住居之面々追々上り來左之面々也

横田惣六
 栗原大八

大森吉助
 藤井利左衛門
 梶原八兵衛

右之外陸路之來著同役住居割左之通

西泊

西川勘兵衛
 太田七右衛門
 村澤喜三太
 本間源之進
 大西諸平
 藤林源三郎
 長田半左衛門
 藤田文兵衛
 津田次太夫

太田尾

一 御非番所は御飾引候得共未だ帆影見隠之達無之候間御番所初御當番所御臺場々々は夜中御挑灯燈方は迄之通候事

○ 同十一日河村の左之通達來

各事相達儀有之候條明十二日四ツ時袴着用權太夫居木屋に可能出候

此段相達候以上

七月十一日

一 晝後戸町魚見岳御飾引候に付當所も爲取入候事

一 御飾中風雨烈敷御旗十九流所々損無別條分は全三流也御旗竿は六本損

有之御長柄鎗御幕も損所々有之候に付近日申出筈に候事

一 左之通掛合來

河村五太夫

安部孫太夫殿

久佐彈兵衛殿

早川利太夫殿

井上權一郎殿

末田喜太夫殿

津田茂太夫殿

今程其御臺場付船に相成居候急用船三艘之内壹艘今日御遣方有之候條引上候早々手許西泊の乗船役所の引合候様可被申付候以上

七月十一日

右三艘之急用船壹艘は是迄當所へ付居候分には二艘は高銚之面々引來壹艘は八挺代船之由右に付高銚來る分之内一艘西泊へ遣す尤水取船兼帶致居候に付御用相濟候は、早々引付に相成様役所へ掛合遣す

一同夕左之兩通河村の貳番々同役中の達來候に付石火矢打にも申談

イキリス船帆影見隠候段相達候に付御番所初御臺場々々御傍向引方

之儀御奉行所の伺相成候處勝手次第致引方每事平常之通可相心得旨
御達相成候條被得其意每事平常之通可被相心得候以上

七月十一日

肥前守様當表へ御越明十二日御非番所御臺場々々御巡見之筈に各
事先例之通被相心得袴着用御往來共御臺場々々波戸へ可被罷出候尤
御臺場飾等之儀は御奉行御巡見之節に準し取計可被申候以上

七月十一日

尙々御刻限之義は未相分候條早朝御巡見之心得可有之候已上

○七月十二日早朝の御臺場飭定録之通爲致候事

一肥前守様御非番所御巡見有之何れも波止出方致候事

一右御歸船後九ッ過西泊渡海權太夫方居木屋へ罷出候處五太夫方立會に

而左之旨被相達候事 御禮は五太夫方直々可申上段御同人の被相達

此節 御越坐に付御番手中へ鹽小鯛拜領被 仰付候事

一先日御道中を被 仰越候 御意達之御禮は名札を以權太夫方玄關へ指
出

○同十三日御國許を被指越候三左衛門殿又之進殿船に來著其外船路を急
速被指越候内御馬廻組大筒役船二三艘著崎いたす

一左之通河村の達來

御非番所御臺場々々佐嘉御方々明十四日四ッ時御引渡可被成旨申來
候條其心得可有之候右に付別紙御船組爲承知指廻候以上

七月十三日

尙々申入候今程住居に相成居候御臺場付船御仕方相成候條其心得可
有之候以上

御非番所請取當日御船組

延壽丸

一四拾六挺立

付來り通船

一三十石小早

供船

一六挺小早

頭槽

一急用丸

御馬廻頭付分

一三拾石小早

蔭尾付

一八挺小早

中老付用船

一急用丸

河村五太夫

木山彈兵衛

三隅藤兵衛

西泊詰

吉田市六

白崎

神崎付之分

一八挺小早

水浦付分

一急用船

一張は

一結は

二

一足代船

高鉾

威徳丸

一三拾八挺立

魚見詰

杉傳兵衛

久佐彈兵衛

右乗組

石火矢打三人

御幕

噤道具

法被二本寄棒

大組頭付分通船

一急用丸

神崎詰

安部孫太夫

西泊詰

原田助太夫

神崎詰

早川利太夫

津田茂太夫

神崎付分

一急用船

右乗組

石火矢打四人

御木屋受取一人

御加子六人

御幕

噤道具

貳張は

二結は

四ノ

一艀船

長刀岩

浮葉丸

一四拾貳挺立

御馬廻頭付分通船

一急用丸

法被四本寄棒

魚見岳詰

伴次郎左衛門

太田尾詰

東郷嘉左衛門

魚見岳詰

櫻井伊平

太田尾詰

東郷平之丞

水浦付分

一急用船

右乗組

石火矢打四人

御木屋請取一人

- 貳張は
- 二結は
- 四ノ
- 一艀船
- 陰尾
- 龜丸
- 一三拾八挺立
- 御船手奉行通船
- 一急用丸

- 御か子六人
- 御幕
- 噤道具
- 法被四本寄棒

女神詰

- 飯永貞助
- 轟徳太夫
- 飯永市兵衛

- 太田尾付分
- 一急用船

右乗組

- 石火矢打四人
- 御木屋請取一人
- 御か子三人

- 貳張は
- 二結は
- 四ノ
- 一艀船

- 御幕
- 噤道具
- 法被四本寄棒

一左之通河村が同役中の達來
 明日御非番所御受取に付御臺場々々付船之内御仕方に相成候條爲心得申入候以上

一唐船壹艘入津いたし候事

○七月十四日四ツ半比御非番所請取相濟候事

一彈兵衛白崎乗出候儘直に當番相勤候事

一此節陸路を被指越候御馬廻之面々左之書付持參に罷越候に付引廻拜

見爲致候事

左之面々御當番所御臺場々々拜見之儀申出候に付申合候上承置候條拜

見之義御執計可有之候以上

七月十四日

大野十郎太夫

御當番所同役中の當

田中仁左衛門

山中甚六

田尻孫一郎

根本忠作

岡澤傳左衛門

堤 權七郎
母里六之進
伊藤八太夫
湯 淺 市 作

何れも居木屋に暫時休

○同十五日白崎に致出番與彈兵衛致交代御番人は左之面々定番に罷一

々々相詰候由尤佐嘉へ引渡之間は戸町へ罷越居候由に候事

白 垣 勘 吉

三宅儀五郎

一夕西川勘兵衛を陸路之同役へ明朝出立之筈に候得共御指支に依り十八

日出立に相成候旨掛合來尤御馬廻組は明日出立之由をも申來由

○七月十六日白崎を與喜太夫致交代引取候事

一七ツ半過を海上急速に被指越候御人數神島に追々著人數別記あり

一陸路御馬廻組大筒役今朝地方致出立候事

○同十七日喜太夫白崎を引取安部孫太夫近來疝邪手強昨日を引入當時出勤無覺束に付白崎出番相省き惣中の助合吳候様同人相宿を相願何れも承知いたし番操いたし候事

一御意達鹽小鯛拜領之爲御禮喜太夫袴着用西泊渡海予も同船す

一晝後彈兵衛吉助三人同船に神崎へ乗出昨日著崎之面々見廻候事

一陸路之同役明日出立に付今夕にかけ地方御茶屋へ參居候様聞役毛屋主

水を申談候趣勘兵衛を掛合來荷物は神崎付船に取廻り候而今日御茶

屋に廻し候事

一三左衛門殿今朝地方出立之由御同人又之進殿小川主計殿船々今日出船

す

一當所へ參居候陸路同役五人七ツ半過致出立地方へ渡海す

一夕津田武右衛門同道に津田久一郎太田啓次郎來初に付御臺場拜見す

○同十八日未明急速に參居候御船々出船いたし候事

○同十九日權太夫殿沖廻り

付廻り

各務與一郎

木山彈兵衛

○七月廿日吉田市六ヶ左之通懸合遣候事

御國許を御備替鉛玉參居候に付明々夫々配當可仕候に付御渡海可被成候已上

○同廿一日彈兵衛喜太夫西泊渡海右玉請取岡役を持參今日は菴包之儘御石藏へ入置神崎分玉高左之通に候事

一四番壹貫五百目玉 十七

一十番六百目玉 十一

一廿八番壹貫目玉 廿七

一卅七番五百目玉 十九

但大筒貳百目玉十五は未廻り不來候由

一在來新增共御筒車助け先頃白帆之節はつれ居候分今日御筒本の如く引戻車助も致置候事

○同廿二日御臺場内損所其外御道具等改候事

○同廿四日市六助太夫職役兩人岡役をも連來御備替之鉛玉左之分入替錆出之分は當時御石藏に預置候事

一四番壹貫目鉛玉四拾之内寛政納十三 文化納十三

一十番六百目同 四拾之内文化納十一

一廿八番壹貫目鉛玉四拾之内寛政納十四 文化納十三

一卅七番五百目同 四拾之内寛政納十三 文化納十三

○同廿五日權左衛門沖廻り

付廻 原 茂 助

一左之通河村の御番非同役中へ達來

明廿六日於田上合戰場高木定四郎砲術稽古打いたし候段御奉行所

御達有之候尤雨天之節は日送之筈に候條爲心得相達候以上

一鐵番の御旗之損見繕に來數廿二之内十八小損御繕に掛る分殘四つは無恙

○七月廿七日御藥干用澁紙手入之反古糊羽毛澁等渡り居候に付石火矢打頭取請取に參候様申談吳候様市六が掛合候間今日取に遣請取來

但當所に手入致候方都合可然評議に御臺場々々石火矢打一人宛渡海明日天氣次第繕可致に付石火矢打頭へ廻狀遣候様申談置候事

○同廿八日艀船明後日解船之儀申出候に付水取都合無指支様申談候處傳馬に水送り越可申旨に付承置候事

一御藥干用澁紙爲手入御臺場々々石火矢打一人宛來九枚相濟

一飯永貞助來同人今日西泊致渡海候處市六が申談候先日イキリス船渡來之節風雨に相損候御旗竿ヶ所々々等集二十本計有之候に付右代り之分御國元の申越に相成候に付其内自然白帆注進相達候節は新古御臺場

は四本宛立増臺場は一二本充に亦も可然有合之處に亦相仕舞候様五太夫方に被申談候に付右之趣當所には貞助方申談候様魚見岳には當所方申遣候様と之義申談候事

右に付今日魚見岳石火矢打來居候に付申含遣候事

一御作事方御筒覆取立に來候事繕も有之候事

○同晦日御旗竿共損分五太夫方見分有之候に付今日持出候様と之事に付石火矢打に爲持致渡海候に付右之書付添箱共に遣候事

覺

一布御旗 廿二流之内十八流

一御旗竿 五本

右損分

神 崎

七月

○八月二日高御道具鍵折損之分今日石火矢打頭取西泊に致渡海候に付左之書付添市六手許迄爲持遣候事

覺

一御道具倉鍵 折損

右急々御仕替に相成度候已上

八月

神 崎 役 號

○同三日彈兵衛白崎出番

○同四日白崎に出番與彈兵衛致交代同所御番人先日之通に候事

○同五日白崎番與喜太夫致交代引取候事

一風雨烈敷御石藏脇之石垣崩落天水瓶損候事

○同七日稻佐辨天今日祭禮に付例之通船留札留之義大頭方達來

一石火矢打頭取西泊致渡海候に付左之書付認市六手元迄遣置候事

覺

- 一 御石藏脇石垣崩落
- 一 同所天水瓶碎損
- 一 御石藏土戸落
- 一 在來小番所漏

八月

神崎詰

石 火 矢 役

○ 同八日先日入替に相成候玉箱封印市六助太夫の名元に分今日仕舞置候事

一 來る十日御飛脚立之義市六が爲知遣候事

○ 同九日五太夫方御當非廻り方有

付廻り

聞次足輕兩人

西泊詰同役兩人

右之外役所小頭棟梁外に

山路九右衛門

○ 八月十一日西泊渡海夫が市六助太夫傳兵衛兵太夫藤藏茂太夫同道水浦

邊遊歩

○ 同十二日御石藏脇石垣繕として職役來

○ 同十三日イキリス船來津之節諸家出張之圖認

○ 同十五日大野十郎太夫方沖廻り

付廻り

八 木 鞆 負

一 市六助太夫が廻狀來明後十七日御藥干方之義に付急に衆評致度儀有之候條朝飯後が西泊の當番之外は何卒出浮吳候様と之趣也

○ 同十七日善太夫彈兵衛西泊渡海御臺場々々も渡海御藥干方之義に付致申合比日左之書寫之通聞役が番頭衆の申越候に付自然之儀可有之も難計例之通不殘干方は手込之儀に付濕氣見の候分計少々宛干方可然尤其御臺場限りに相仕舞可申致評決大頭にも右之段申出候事

對州聞役の御奉行御目付へ届に相成候寫

朝鮮國全羅道之内濟州と申所之島へ異國船一艘渡來之様子風聞有之候に付彼國へ指置候對馬守役人の譯官共へ尋問仕候處未駈と爲致京便は無之候得共右島に異國船一艘乗込候と相聞先是と怪敷取沙汰は無之段申出候に付猶彼國之動靜取糺注進申越候は、早速御案内可申上候得共此段御届申上候様申付越候

巳八月十三日

一左之通河村の御臺場同役中に達來

明十八日十九日深掘於野牛島石火矢稽古打致候段御奉行所へ御達有之候尤雨天之節は日送之筈に候此段爲心得相達候已上

○八月十八日五太夫方の左之通達來

御當非御臺場々々御圍に相成居候御藥明十九日の方方に相成候條右

千方中各事御用之外他出無之様可被申合候且御石火矢打にも同様他出不致様可被申聞候已上

○同十九日市六助太夫來今日長刀岩爲御藥千方渡海之筈に候得共依天氣合相止候尤千方諸道具は當所へ今日中に送り遣吳候様相頼候に付目錄之通請取無程同所へ爲持遣候事

御藥千方道具左之通

- 一斤量 壹ッ
- 一風袋箱 壹ッ
- 一千木 壹ッ
- 一桐油箱 拾枚
- 一鐵の振ひ 三ッ
- 一玉藥箱 三ッ
- 一澁紙 九枚

七口

- 同廿日長刀岩御藥干有之候事
- 一五太夫方左之通達來

別紙之通御奉行所を被仰達候に付可被得其意候已上
尾張大納言殿去月廿一日逝去に付 公方様右大將様定式半減之御忌服被爲受候尤普請は三日鳴物は七日停止之段從江府被仰下候依之右日數之通普請は今十九日明後廿一日迄鳴物は來る廿五日迄令停止候

右之趣爲心得相達候已上

已八月十九日

- 八月廿二日

野村勘右衛門去る三日鐵砲大頭被 仰付候此段爲御承知申入候以上

- 同廿三日御石藏脇石垣今日成就候段相届候に付致見分候事

- 同廿四日白崎に致出番與彈兵衛交代いたし候事

- 同廿五日同所に安部孫太夫と致交代御木屋へ引取候事

- 一河村左之通申來

來廿六日御奉行御目付兩御番所御巡見有之御臺場々々は御見流之筈に候各事袴着用にて通船之節請持之御臺場波戸先に可被罷出候尤御傍向等は例之通可被相心得候且御出宅刻限は未相分候得共五ツ時之心得可有之候已上

- 一河村相宿三人に左之通申來候に付八挺無程地方に廻る

其御臺場付左之御船明廿六日御仕方に相成候條爲御承知申入候由

七の八挺小早

- 同廿六日早朝を御傍例之通爲致候事

- 一四ッ比兩御番所御巡見餘は御見流當所鼻迄御船來三人共袴着用鍵爲持波戸出方いたし候事

○同廿七日イキリス船來津守衛の畫彩色迄相濟候事
一五太夫方左之面々に相達儀有之候條明廿八日四ツ時居木屋へ罷出候
様掛合來

野間源市
安川平太夫
根中藤藏
飯永貞助
末田喜太夫

○八月廿八日喜太夫西泊渡五人相揃候上一同左之通被相達候事
當御番一と建御滅番後石火矢役九人詰に被仰付候依之各事加番之
内々本番に直り可相勤旨今便御下知申來候其心得可有之候委細は追
々可申談此段相達候事

○同廿九日市六助太夫來當所御藥干方いたし箱數都合三拾四箱何もさら

付居候に付箱の蓋取候儘致干方候事

○九月朔日彈兵衛魚見岳へ寄合に付行同所今日御藥干も有之候事
一河村方兼頼之海寇略圖寫掛る

○同二日彈兵衛同船に戸町の渡海兩番頭に暫時嘶而歸將又浦上善之
進方兼々頼居候イキリス來津守衛之畫圖出來分をも同人に持參す

○同三日喜太夫同船に太田尾渡海御臺場々々も來火通一件申合也

○同四日貞助利太夫嘉右衛門伊平徳太夫來昨日風波に太田尾へ渡海不
致候に付申合之都合間合に來昨日出席限に申合御國許同役へ返書遣
候寫爲見候處何も致承知指急御飛脚立に遣候に付右之手數也
一浦上善之進喜多村喜兵衛御作事所見分に來候事

○九月五日權太夫方沖廻り

付廻り 各務與一郎

外に同道

伊藤庄左衛門
林 伊兵衛
上 田 佐 平

○同六日左之通河村を達來

三左衛門殿播磨と改名有之候段御國許を申來候條爲御承知相達候以上

一市六を來る七日八日兩日水浦御藏御藥干方致候條申合致出方候様且石
火矢打にも出方之義談吳候様雨天之節は日送り之義も申來

一喜太夫同船に戸町渡海兩藩頭（り）に暫時嘶る歸

○同七日兼申出置候ヶ所々々爲繕御作事を來仕調候事

一月成る使來兼河村を來居候海寇記略兩三日借用有之候由に持歸

對馬聞役を御奉行所届書寫

先達を御届申上候朝鮮國全羅道之内濟州と申所之島に異國船一艘乘

込候と相聞候に付彼地へ指置候對馬守役人を譯官共へ右之船動靜取
糺候處右島之沖合に帆柱八本立候異國船一艘碇を入懸居候處地方へ
仕寄候體にも不相見致出帆外相變義無之段申出候此段御届仕候様申
付越候

巳八月廿五日

此分は對馬聞役を主水の遣候分歟

別紙御届申上候朝鮮國濟州と申所之島に異國船渡來に付出入之體勢
譯官へ委敷相尋候處右島は地方を程遠く相隔候場所（り）都表譯官共
へ番通無之程之義に付和館へ表立届出不仕相聞申候此段御自分様御
心得迄御含置可被下候以上

巳八月廿五日

○同十日彈兵衛同道に白崎を千本邊遊歩琉球椀土瓶竹等求
一茂太夫來同人今日西泊に致渡海候處一昨日歟御飛脚著大頭狀之内に喜

太夫家頼判之者兼之致入牢居候處於呂島へ流罪被 仰付候由に付喜太夫恐入申出等可有之に付跡聞之書狀は無之哉段々相調子候得共此節急御飛脚故か何方も書狀不相見自然は跡聞を掛合有之間敷に付茂太夫歸立寄申談吳候様市六を相頼候由致噂候事

○同十一日西泊に致渡海喜太夫恐入指控候義五太夫方迄申出候處預り置に相成尤御用筋は指支無之段被申談未だ跡聞を掛合不致候得共市六の談振に依る今日恐入申出候段加演舌置候事

一右之序五太夫方此節 御越座之節神崎の御上陸に相成筈に付其心得に萬事御手當向等才判致候様被申談候事

○九月十二日喜太夫又西泊渡海左之指出いたし候事

覺

一御矢來廻諸所損

一常住木屋付雪隠大損

九月

神崎詰

役 號

覺

一空俵五俵 繩共 御越坐御手當用

九月

神崎詰

役 號

一御筒干入用之品々は石火矢打を書付取候而今日指出例之品々故略之一市六の別紙之都合五太夫方被相達候に付爲心得指廻候様と之事に而廻狀來寫左之通

薩州聞役を爲知且御奉行所届書寫

例文略之然は薩摩國河邊郡平島の異國船壹艘漂來且琉球國之内那覇沖并八重山島へ暎咭喇國之船渡來等之一件に付別紙之通伊澤美作守様遠山半左衛門様の國元家老共今日御届仕候に付此段爲御知已下

略之

九月四日

興 四 郎

薩摩國河邊郡之内平島沖に當七月十二日異國船一艘相見候に付陸
役々相守居候處異國人四人橋船を渚近漕寄用水拂底之様子致手様候
に付其儘本船に乘歸未申之方は乘行無程帆影見失何ぞ不審成義無御
座段彼地へ指渡置候役々共申越候事

右壹通

當七月九日琉球國之内那覇沖へ異國船一艘渡來卸碇候に付役々差越
漂來之次第相尋候處言語文字不相通候得共啖咭喇國之船人數六十人
乗組致渡來候段手様等を以相分食料等任望相與候處類船相待候模様
に而致滞船居候然處同十六日同所沖へ又異國船一艘卸碇候に付同斷
相尋候處乗組之唐人を當五月琉球致來著候啖咭喇國之船に而出帆後
朝鮮國に指越夫より日本長崎に乘渡又々致來著候段申出是又任望食

料等相與兩艘共石火矢等載付有之候得共兵船之様子共不相見得候且
琉球に殘居候佛朗西人并唐人を右兩艘之乗頭へ致面會度申出強而指
留候得共承引無之候に付役々付添爲致而會候處濱邊に布屋を張致對
談候に付跡以唐人へ何様之事に而爲有之哉と承候處右啖國船に而大
總兵船等之模様不相知段申聞其餘之事情何れも不相分候左候而啖國
船又々來正月比には來著暫滞留天文を見可致出帆段申置同廿日無異
義兩艘共戌亥の方の致出帆候滞留中取締向嚴重申付置尤佛朗西人并
唐人共平穩罷在未大總兵船は來著無之候段琉球を飛船取仕立申越候
事

右壹通

當五月二日琉球國之内八重山島に異國船一艘渡來卸碇候に付役々爲指
越漂來之次第相尋候處異國人は言語文字不相通候得共唐人一人乗組居
啖咭喇國之船に而人數二百人乗組當四月呂宋出帆之段申出石火矢等載

付有之候得共兵船之様子に無之橋船を濱邊に上陸布屋取拵兩三人つゝ、罷在山野等致見分候に付上陸不相成國法之趣を以強ち相斷候得共不致承知小島之義に候得は無是非夫なり警固番人共付置任望食料等相與候處同九日致出帆候段兼ち彼地に指越置候役々共申越右は先達ち御届申上候當五月那覇へ來著之嘆國船に相違有之間敷段も此節琉球を飛船取仕立申越候事

右壹通

○九月十三日水浦御圍御藥干方有之段市六を爲知越候に付彈兵衛喜太夫石火矢打召連致渡海今日相濟候事

一河村を左之通達來

來る十五日於田上陣場立花左近將監殿家來三百目以下鐵砲致火通候尤雨天之節は日送之筈に候段開役を申來候條爲心得相達候已上一艀船梶取來船奉行を本艀船に相成候に付廻り來候様被申に付今日廻り



度段申出尤未た手許掛合は不來候得共承届今日掃除等相仕廻候ち參候様申付候事

一御作事所々繕に來候事

一具足箱跡付玉藥箱對鎗等荷仕舞度候事

○九月十五日五太夫方市六を左之通達來候に付致承知候様市六を廻狀來

松本主殿倅宗三郎爲後學召連罷越兩御番所拜見之義於御國許相願御聞濟相成候段御下知に相成居候然るに御臺場々々をも拜見爲仕度と主殿を引合有之 御越坐立被指越候小船頭之内一人同道可罷越候條其心得御同役中には貴殿を可被申談候已上

一河村を來る廿二日限御先荷物付目錄指出候様達來

一左之通五太夫方を神崎三人に當申來

其御臺場付艀船御減番後御船奉行住居有之近々乗替候條爲御船仕舞

西泊に乘込之義御船奉行に申出有之候條承置候其心得可有之候以上
一左之通五太夫方に御臺場々々同役中に達來
各事申達御用之義有之候條明後十六日四ツ時袴着用にて權太夫居木屋に可被罷出候以上

九月十四日

尙々御臺場當番病氣等にて難罷出面々は聞次可被申談候以上

○九月十六日白崎出番與喜太夫致交代引取

一彈兵衛西泊渡海御番手中一同權太夫方居木屋へ罷出左之通被相達

紅毛船出帆之時節に趣候條御番所を初御臺場々々入念相勤御石火矢

御大筒手入等無油斷仕候様拙者共得指圖候様 御意に候事

一御作事方來御石藏土戸并常住木屋瓦しつくひ等候事

一市六來御作事方をも召連御樂箱三ツ棧落分仕整候事

一圓太夫に廻狀女神出番用品々代錢五百廿五文御當番所十人割壹人前五

十二文之由申遣す

○九月十七日五太夫方に左之三通達來

尙以 御巡見當日未明 御乗船之筈に候其心得可有之候以上

殿様當表爲 御越座去る十五日御國元 御發駕明十八日大村に當所御

著翌十九日早朝兩御番所并御臺場々々左之御順道之通 御巡見之筈に

候條各事袴着用にて御往來共御臺場々々波止に可被罷出候自然病氣等

にて難罷出面々は早々可被申出候其段申上事に候

一御石火矢御大筒等手入之義并掃除等宰判可有之候當日御傍等之義は例

御越座之通可被相心得候以上

九月十七日

但太田尾魚見岳詰同役へ申合ヌ、レ女神に出番致候様且又喜太夫に
は波戸出方之義今程指控預り置候條 御著座之上は相調子猶相達に
可可有之と書込有之候事

御順道左之通

西泊御番所 戸町御番所

神崎在來 神崎三の増

同貳の増 同壹の増

同新規 同御石藏

右御巡見

太田尾 ス、レ

右御船中御見流

女神 魚見岳 白崎

右御名代

尙以御名代被相越候御臺場は同所御石火矢打頭取并御道具請持之者
之致案内候様可被申談候已上

九月十七日

紅毛船湊下當日女神御臺場は被申談一人宛不明様出番可有之候以上
一紅毛船湊下來る十九日廿日兩日間湊下可致候條兩日共湊下之節御臺
場飭并心得等其外毎事例之通可被相心得候以上

九月十七日

一今壹通は本番之面々先荷指出來る廿二日指出候様と之文面なり

一助太夫岡役連來御石藏は入有之候鐵玉不殘持歸近日御船便は御指返な

り

○九月十八日御筒手入掃除等石火矢打之致候に付致見分候事

一市六助太夫御作事方二人來去春御入替に相成候由鉛玉之分十四箱玉性

合致吟味候處左之通に付印付置尙帳面に書取候事

壹貫五百目玉 十六惡 四ツ吉

壹貫目玉 三十七惡

八百目玉 廿七惡

三百目玉 十六悪

但増臺場分計也

一五太夫方見分兼沖廻り

付廻 喜多村嘉兵衛

一明日 御巡見後地方御茶屋に致渡海度且又其節は歸而已相届度旨致尊候處五太夫方被開置候事

○同十九日早朝に定録之通御飭爲致候事

一殿様雨天に付兩御番所計御上り餘は御見流女神邊迄御船參る御名代彦兵衛殿も見流計是亦女神邊に引返に相成候事

但三人共波戸出方服體は兼る市六に及相談候處同人も上は張致由に付相宿何れも同様にて袴着用御禮申上候事

○同廿日定録之通御臺場飭り爲致候事

一今日湊下之趣中早御飛脚立例之手數なり

一先荷差出左之通認明日指出筈に候事

先荷差出

一四〆は 米箱 一壹からけは 樽三ツ

一一〆は 長箱 一壹〆は 小箱

一壹〆は 蕙包

〆五口

九月廿一日

井上權一郎書判

河村五太夫殿

一左之通五太夫方達來

各事相達御用之義有之候條明廿一日四ツ時袴着用にて權太夫居木屋に可被罷出候以上

九月廿日

尙以當番病氣等にて難罷出面々は開次可被申談候已上

一九ッ比紅毛船湊下いたし候事

一殿様阿蘭陀船湊下後 御立被遊候事

一御越座立御船に暮比神島の座直り夕出船いたし候事

○九月廿一日彈兵衛喜太夫西泊渡海御番手一同權太夫居木屋の罷出候處

此節就 御越座御番手中の目錄之通拜領被 仰付候事

鹽小鯛 壹桶

右御禮權太夫方五太夫方御木屋の罷出申上候事

一同日先荷差出致且又左之書付も市六手元迄遣置候事

覺

神崎詰石火矢打頭取

白垣傳平

請持筋入念相宿質素に申合先般イキリス船渡來之節御手當御飭向等速に相整出張中申合晝夜無油斷相守風雨之節は心懸御旗其外御道具

類損少様仕手廣御臺場之義に付 御巡見前掃除道造等自身にも相働

別る九月立 御巡見は艀船御引上後に同岡役無人に御座候處程能申

合指はまり出精相勤申候

同 石火矢打中

平日申合宜引締イキリス船渡來之節毎事速相整出張中申合晝夜無油斷相守風雨之節は心掛御道具類相厭 御巡見前掃除道造等何も相働別る九月立 御巡見前は同役無人に御座候故猶更出精相勤申候

右何も宜被及御沙汰被下度奉存候已上

已九月

神崎詰 石火矢役

覺

神崎詰

七八丁小早堀取

磯邊 仁平

平日心得方宜船内申合行届受持筋入念聊無指支出精相勤申候

同 船楫取 杉 千五

船内申合宜手堅繫船仕岡役等精を出し渴水之節は汲廻し聊無指支出精相勤申候

同 急用船之頭

志賀 作八

十番同 初浦 又十

六番同 蘆屋浦 又七

追々交代仕何も心得方宜出精相勤申候

右何も宜被及御沙汰被下度奉存候已上

神崎詰

石火矢 役

巳九月

○九月廿二日昨日之御禮として袴着用權太夫方に罷出候事

一左之通河村の達來

明廿三日播磨殿六半時乗船に兩御番所初御當番所御臺場々々見分之等に候條各事袴着用にて御臺場柵内にて可被罷出候女神は出番有之居候に付ス、レは太田尾一人可被罷出候順道左之通に候尤案内は石火矢打頭取并御道具請持之者を戴付着用相勤候様可被申談候已上

順道左之通

西泊 戸町

女神

魚見岳

神崎

太田尾

すゝれ

水浦御屋敷

大鳥崎

尙以魚見岳神崎常住木屋にて自然休息候義も可有之候條其心得可有之候以上

一太田尾付四丁小早當日御仕方に相成候條可被得其意候已上

○九月廿三日左之通河村の達來

播磨殿兩御番所初御臺場々々見分候義雨天に候得は延引に相成同送り見分有之旨申來候其心得可有之候以上

○九月廿四日彈兵衛女神出番

一播磨殿兩御番所御當番御臺場見分 付廻 吉田市六

一明日中早御飛脚立之義市六が爲知來

一佐嘉御示談に相成居候御筒分配所下見分に五太夫方も被參候筈に候へ共不快に付市六初同役申合下見分致出方候様と之事に付明日太田尾へ乘出候様次郎左衛門徳太夫市兵衛來申談候事

○同廿五日女神へ出番與彈兵衛致交代候事同所詰方石火矢打左之通

柳坂順右衛門

陶山惣市

上村貞作

一女神致出番居候處御筒分配所爲下見分市六初同役十二三人來

○同廿六日女神番與利太夫致交代引取候事

一昨日左之通河村の達來候由に付今日寫置候事

明廿六日松平肥前守様御領内深堀於野牛島御同人御領大砲モルチ一ル當地御鐵砲方高木定四郎致試打候旨尤雨天に候は、日送候段申來候條爲心得相達候以上

九月廿五日

一歸り船千手丸手明口合に來先荷船長王丸手明も來

○同廿八日喜太夫同船に西泊の水浦稻佐戸町行

白杵水溜桶三の藏に納置稻佐に醬油味噌求隨分吉百文也
三十二文

一今日播磨殿水浦見分之由に大頭聞次足輕頭同役頭取同所に參居候事

一左之通河村の達來

各歸先荷物積方日割左之通御船奉行方申出有之候條被得其意積方可有之以上

九月廿七日

廿八日積

若宮丸 久佐彈兵衛荷物

梶取 上田忠四郎

廿八日積

長平丸 井上權一郎荷物

梶取 宇宮磯七

餘は略之

○九月廿九日朝方紅毛船帆付初候事

一十郎太夫方沖廻り

付廻 梶原七十郎

外に同道 山内助左衛門

有村卯兵衛

○同晦日左之通河村方加番同役中へ達來

御臺場々々配當に相成居候御道具各御同役中々夫々預書差出有之分御減番後は左之面々へ預り被指出候様相達候其外御臺場付御道具類相改被請取候様申談置候條其旨被相心得御引渡可有之候委細は吉田市六の申談置候條御承知可有之候已上

九月晦日

安部孫太夫

吉田市六

原田助太夫

野間又六

安川兵太夫

早川利太夫

根中藤藏

飯永貞助

末田喜太夫

今一通本番同役中の當候分左之通

御臺場々々配當相成居候御道具各御同役中の夫々預指出有之分御減
番後御當非御臺場分不殘各受持申談候條夫々相改御受取候各被申
合預り書可被指出候其外御臺付各請持御道具類共相改引渡有之候様
御役中にも相達置候條可被得其意候以上

九月晦日

今壹通本番先荷積方日割申來略之

一石火矢打井上宅四郎を以頼置候白砂糖毛氈求來本興膳町久松の家來今
田辰重と申者脇を求遣候由也右辰重は根元御國之御足輕の由

一毛氈 代銀貳拾目〇八ン 店方五百文餘下直なり
一白砂糖唐人一番 代銀拾八匁二分二ン 店方六七十安し

一御作事を瓦しつくひ繕に來

○十月朔日先荷からけ荷目録書狀等認置候事

一白田尾儀に於施我鬼と見小船數艘來燒立候に付石火矢打へ不指立御臺
内見守猥之義無之様見け之義申談候事

一喜太夫へ五太夫方を交代都合に依て太田尾に引越候様申來
一三番々先荷船を大森吉助書狀并米入箱送り來最前イキリス船渡來候節
滯留中之算用也

○同二日喜太夫同船西泊渡海喜太夫は本藩之面々申合也拙者は三隅藏兵
衛御木屋に於歸船中の申合いたす杉傳兵衛も出浮候事
一御筒覆取立之義口上に於大頭へ申出置且左之書付も指出置候事

覺

一御石藏入口上塗落

神崎詰

十月

九十二 役 號

一河村 左之通 達來之事 加番中 當

九月廿八日

加番引拂御船組別帳壹冊指廻候條 被得其意先に無滯被指廻留り可被
指返候已上

已長崎加番引御船組

虎丸

一三百石積

伊藤庄左衛門

梶取吉村 藤吉

順風丸

一三百石積

大組 山内助左衛門

梶取山本 左平

千年丸

一五拾挺立

同 立花清作
御足輕 三隅藤兵衛

同 梶原七十郎

御石火矢役 久佐彈兵衛

同 杉傳兵衛

御石火矢役 井上幸左衛門

同 井上權一郎

同 桑原彌七郎

三光丸

一四拾六挺立

御足輕 梶取吉村 林藏

御石火矢役 伴次郎左衛門

同 東郷嘉右衛門

同 櫻井伊平

同 東郷平之丞

寶龜丸

長崎警衛記録 (弘化二年十月)

一四拾六挺立

梶取上杉武七
御石火矢役

轟德太夫

津田茂太夫

飯永市兵衛

大森圓太夫

延壽丸

一四拾六挺立

梶取梶原時次

大筒役頭取

白杵佐太夫

大筒役

木立藤次

因源七

林榮次郎

山崎平太夫

梅野團之丞

自在丸

一貳百石積

大筒役
梶取吉村茂作

榎千之丞

堀仙右衛門

扣風丸

一百五拾石積

梶取浦田大八

坂口扣三郎

淺香了藏

一八挺小早

三艘

一六挺小早 壹艘

一急用丸

八艘

一貳百石 壹艘は播磨殿荷物 三艘

一百三拾石 輕御足

一艘

一百四十石 御足輕 壹艘

一百貳拾石 輕御足

壹艘

一艀船 二艘

一 足代船

四艘

御船數三十二艘梶取名元等略不記

一本番之面々申合之上御道具類指出是迄之分仕替御當番等分は同所詰本番六人の連名御非番所は同所詰三人連名に大頭の當指出に相成

但御旗其外損仕替中之分は現數書整指出委細は三番々の申送り候筈に相決候事

一 晝比阿蘭陀船牛積八ッ比乗切候節石火矢七放打又カヒタン歸之節五放致放出候事

一夕石火矢打頭取八挺梶取招酒肴索麵等出候事

○十月三日朝五ッ時比阿蘭陀船致出帆硫黄廻り計石火矢致放出

一 海寇記略寫相濟綴立候事

一 彈兵衛地方見物致渡海求物等相願候事

一本番歸船中船組達來同役々分計書拔左之通

御足輕頭六人

一 五拾六挺立 吉田市六

御醫師一人

野間又六 飯永貞助

一 四十六挺 安川兵太夫 末田善太夫

根中藤藏

一 三十八挺立 安部孫太夫

早川利太夫

一 左之通河村の達來

紅毛船致出帆候に付御臺場々々御幕張被取除夜中御挑灯も燈方に不及平常之通可被相心得候此段相達候已上

十月三日

尙々本文之趣に付女神白崎兩所共不及出方候其心得可有候以上

○同四日昨夜半風雨烈敷居木屋雨戸障子等吹放其外損有之候に付明日申出筈に左之通認置候事

覺

一常住木屋雨戸諸所御手入に相成度候

一同窓戸袋御手入

一障子一枚大破御仕替に相成度候

十月

神崎詰

役 號

一御道具左之通御石藏へ入置候事

一御箆 横手共 貳箱

一置札火蓋留革

一半鐘 壹箱

一太鼓 壹箱

一苧采配

貳柄

一御道具藏鍵二ツ兼石火矢打頭取に相渡置候事

一千手丸荒荷物取に來十一口渡跡は乗船之節取に來候様申談

一記録類冊數取調子書送仕整記録入記帳にも書載三番々太田尾詰面々

當名致尤是迄は西泊詰平同役に當候得共右之通此節一と立御番之都合

に依申合候事

一御筒覆取建并御石藏上塗仕整に御作事方來相仕舞候事

○十月五日左之通河村に達來

紅毛船帆影見隱候段御奉行所を爲知有之候に付今日播磨殿御奉行所

に被罷出加番之面々引拂可申旨被相伺候處勝手次第引拂候様被仰

聞候段播磨殿に申來候條各事勝手次第乗船可有之候以上

十月五日

尙以指立狀可相渡候條拙者居木屋に被罷出御受取可有之候夫是可及

晚景候條明朝乘船可有之候以上

一 九ツ半比三番々衆神崎著船無程座直り致候條彈兵衛喜太夫三人共同船
ニホ大頭野村勘右衛門方乘船御目付時枝市太夫乘り船其外同役船々
行夫々太田尾西泊に致渡海三番々同役名元左之通

御番所詰

西川勘兵衛
本間源之進

高鉾詰

藤井利左衛門
梶原八兵衛

藤林源三郎

大西諸平

大森直助

津田久一郎

太田啓次郎

太田尾詰

一夕明六日本番内交代之義河村々本番之面々の達來

○十月六日御石藏封印付毎事石火矢打頭取に申談置候事

- 一 荷物等目錄へ引合せ石火矢打に爲頼置手廻道具計爲積候而八挺に而三人一同乗出喜太夫は太田尾へ揚彈兵衛拙者は千手丸に致乗船無程西泊へ揚番頭衆初木屋々々廻勤夫々天満宮へ參詣直に千手丸へ乗込候事
- 一 同役共追々乗合相揃候上大頭へ届いたす番頭取未だ地方に引取無之故手紙届也差立狀は乗合名口御足輕頭請取候事
- 一 本番衆も追々乗船也七ツ比加番船は類船へ聲掛合西泊出船致し神島に座直いたし候事

一本番衆御船々は暮比西泊出船入夜神島へ來候事

一十月六日夕四ツ半過本番船加番船共神島出船和氣に而押船也

○同七日押船に而五ツ時比板浦著無程出船七半比牛ヶ首著

- 同夕五ツ比同所出船四ツ半比九艘泊著
- 同八日六ツ比楠泊出船九島内通船風向ひ候に付平戸領大屋へ九ツ半比著す類船外に壹艘來四十六丁六挺小早急用丸計なり大屋浦へ揚遊歩す
- 同九日六ツ半比大屋出船押船九ツ時比難所崎の潮掛り無程出船九半時平戸著暮比田介へ直候本番加番共追々田介の來著
- 同夕九ツ半比本番船田介出船風向候に付加番船は不漕出候事
- 同十日風少西に廻候に付田介に帆柱立朝六半比出船呼子沖迄は折々櫓を交夫の追手に暮一杯に志賀へ來入夜波戸場著船
- 一何れも波戸著之上髪月代等致し夕四ツ半比揚る彈兵衛同道同方立寄彼是に九ツ比歸宅實家弟周藏其外大賀權次郎波止迄來候に付同道に歸尤荷物は明日揚吳候様梶取手明へ申談置
- 一歸著届は連名に認彈兵衛へ頼置候事
- 一本番船は晝七ツ時比波止場著之由に候事

- 同十一日荷物等揚來無別條請取候事
- 御殿出方本番一同御月番彦兵衛殿面謁相濟候事
- 一歸著指出は例之通加番同役連名に大頭へ指出候事
- 一歸實家へ立寄候事
- 同十五日本番之面々御目見有之候事
- 十月廿日に 明後廿二日 御目見被 仰付に付罷出候様御切紙來
- 同日暮比妻俄産之催六ツ比男子出生前後無別條
- 同廿一日伊丹九郎左衛門大頭月番に付血氣引入之届且引入中間次櫻井伊平の申談置候段をも相届候事
- 一伊平へも爲知且聞次之義も頼遣す且又明日御目見に付同人も罷出候に付組合中一手中にも廻狀頼遣す其外頭衆取合之義をも頼遣候事
- 同廿七日伊丹の出勤届致候事近所廻勤
- 鳥飼宮致參詣候事夫八百屋助六留守中日用其外出銀之儀頼置候

に付爲挨拶土産持参す

○十一月朔日小兒へ名經吉候事

一今日津田治太夫宅に急打寄之義櫻井伊平が致通達候に付晝後行候所御火通一件に付兼而同役中を指出置候横折に御付札に下り候由今日栗原大八阿部半九郎津田治太夫三人呼出に右之横折大頭より被相渡候由且又御火通御用掛其外玉込打方名元頭取を取出候も存寄無之哉明日返答致吳候様と之事に右之申合もいたし候處何も存寄無之候得共少々加演説置度處有之候に付右之趣明日早川利太夫が吉田市六迄返答之筈に申合且又長崎詰方同役之掛合は拙者請持歸候事但三日長崎に御飛脚立之節掛合候事

横折の御付紙之寫左之通

鐵砲大頭

書面之趣は無餘義趣にも相聞候得とも師家之面々は不殘先例之通玉込御筒致打方相殘玉込之分を門弟家業之面々丁日尾形至曰丁日とは後濱に於て鐵砲定日は取初石火矢役中可被申聞候右之趣御家老中にも申達置候已上

十月

○十一月五日大頭役所出方加番早船乘御足輕頭同役大筒役申合四艘共々申合乗前入念荷物取扱方等丁寧致何も心得方宜相見候に付手筋を賞詞有之候は、已後之勵にも可相成段連名に申出候事

○同十日御火通御用掛り被 仰付有之火通之記に記爰に略す

弘化三年丙午正月二日乗船に於長崎御火通御用に出立二月十三日歸著
其後六月長崎のフランス船渡來に付同九日急速陸路出立同十七日歸著
右兩様共別記有之候事

○八月十六日左之御切紙到來

貴殿事御用之義有之候條明後十八日四ツ時御館に可被罷出旨御月番
又之進殿被仰聞候其心得可被罷出候以上

八月十六日

○同十八日御館出方去年貳番々連中追々相揃御用初拙者共八人一同御用
に於又之進殿に左之旨被仰渡候事

去年長崎在番中イキリス船渡來之節御手當向速に相整夜白相守請持
筋入念間には御非番所へ致出張候向も有之毎事無御間缺様格別出精
相勤候段達 御聽依之目錄之通被下候事
其外今日御用之而々左之通承り候分計記之

引入

御反物

同

御時服

同

金子五百疋充

同七百疋

御非番所詰

金五百疋宛

月成權太夫

蒔田權左衛門

大野十郎太夫

河村五太夫

毛屋主水

御足輕頭八人

吉田市六

伴次郎左衛門

飯永貞助

轟德太夫

東郷嘉右衛門

櫻井伊平

津田茂太夫

〔東郷平之丞

亡父孫太夫^の

安部孫七

同彈兵衛へ

金三百疋

久佐久

金貳百疋

大筒役

御當所詰

原田助太夫

野間又六

杉傳兵衛

井上幸右衛門

井上權一郎

大森圓太夫

桑原彌七郎

金三百疋宛

引入

〔末田喜太夫
安川兵太夫
早川利太夫
根中藤藏

右之外は不分候間不記候事

右御禮廻りは御家老中大頭中且詰合番頭衆へも行

イキリス船就渡來御非番所詰同役の達に相成候書付類左に寫

○七月四日市六ヶ別紙五太夫方被相達候間爲心得指廻候段申遣

御番頭中の

聞役

以手紙啓上仕候合圖打仕候に付即刻御奉行所相伺候處佐嘉御方^が昨夜遅く彌白帆船々見極候段御届有之野母遠見^も注進有之例之阿蘭陀船も入津跡船無之旨申出居候に付何れ相替船に可有之依之沖御番

所向彌御嚴重に有之度様子に寄佐嘉御人數被差越御非番所御引渡に相成候様御達も可有之哉御國の増御人數之義唯今御指圖は不被成候得共兼御規則も可有之候に付被指越候共御奉行衆御存念は無之旨用人を以被相達候右之趣即刻走飛脚を以言上儀に御座候御手前大早飛脚をも差立申候此段可得貴意如此御座候已上

○一左之通五太夫方が被相達候事

此節白帆注進に付自然様子に仍御非番所御渡之都合にも可相成候に付右之内含に其節に至御便利宜様可被申合候此段申入候以上

七月五日

同五日五太夫方が長刀岩詰同役の左之通り達來

十郎太夫儀其御臺場の今日方致出張候就るは假木屋取建申付置候彼是爲御承知申入候已上

尙以十郎太夫の各居木屋の住居に相成候條其心得可有之候

一山崎久右衛門弟致渡海五間に貳間之假木屋を常住木屋向の取建

一十郎太夫長刀岩へ渡海に相成候得共假木屋未だ成就不致候に付片木屋

の同役住居候義申入無指支由に付四人一所に相住居候事

一假木屋成就之上足輕頭八木鞆負梶原七十郎手付共住居致候

一市六の左之廻狀遣候事

此節著岸之イキリス船の願出候地利測量は御免不被成薪水は御渡被成候趣に御座候右御渡有之候得は速に出帆可仕由然るに五太夫方被申談候は根元御制禁國之義に付出帆之折柄彼船の不法之働いたし石火矢等打掛申間敷者に亦無之其節は答之矢不返しては不相濟由被申聞候殊に蔭尾長刀岩高鉾之三ヶ所は專覺悟肝要之場所に付唯今兼亦御手當之白帆用之分一枚込方致し居可申由尊有之候に付其義は御手當迄に亦實に込方仕居不申段申述候處何れに見込も可有之候得共

何卒急場之變に應し候様有之度趣被申候右に付畢竟一放には相濟不申候條御玉も鐵玉は指置鉛玉を御手當可然由 公義御玉は御兩家御封印分けにも相成居候得共此節之義に付封印切解候處支無之由をも五太夫方被申聞候尤御藥は御足藥歟増臺場之分を御手當に仕候積に御座候各様へも御同様有之度御掛合申候様被申談如此御坐候以上
七月五日

尙以申迄も無之候得とも佐嘉封印御切解被成候は、五太夫方の御差出可被成方可然候此段申述候以上

○一左之通聞役の掛合候趣五太夫方の十郎太夫方掛合へ相成候由に同方被申談候事

毛屋主水

月成權太夫様

五太夫殿の御別紙之趣御問合之御趣意を以唯今御奉行所へ罷出用人

出會問合候處尤之義に付美作守殿へ相達候は、御挨拶可有之候旨相達候上相答候は端船に異人共御臺場近邊乗寄候は、相成丈仕形等を以被相制致上陸候共同様相成丈穩に御制有之度夫共押致上陸候は其場所に遠卷にいたし其旨早々御奉行所に被達候は、猶又通事其外兼手當之役々早速被指出相諭させ可申尤異人共其内法外亂妨に及候歟或は劔拵拔候は、其節は 此方様御規則通御取計被成應變之御計可有之候様と之義に御座候

一昨日佐嘉領中島と歟申所へ瀬岩有之類に右之岩に寄候に付和に制候由其節檢使船へ右様之事有之候に付召捕可申哉と佐嘉の問合候得は檢使指圖難出來其旨御奉行所に申出候由に付其後尙又通詞其外役方を以諭有之候處一體彼國不締之人品と相聞其上言語不相通故歟下賤之者共迄一々制度行届兼居候趣に漸々相施候處今程は末々迄制度行届候模様相見端舟等に乗廻をも相止候由右之通に付今日に至

候は右様之義も有之間敷と被存候得共御問合之趣一體は御尤之義に被相心得候由に御座候

一唯今御番頭中様の別紙を以彼船近々歸帆可被仰渡旨御奉行所之模様問合候一件御掛合仕候に付則御承知可被成候

右之通近々出帆可仕と御請も申上居候由に付相成丈穩に御制有之度との趣意に御座候佐嘉にも昨日聞役へ同様之趣意被相達候由に御座候爲御承知如此御座候已上

七月六日

一同夕月成か御番頭三人の使來佐嘉之御人數相揃候に付御非番所明日請取申度旨申越候由に於西泊御番頭寄合候義申來

○同七日番頭衆御番所へ引取に相成候事

一御非番所御引渡に相成候得は立會は兼而御達通詰方石火矢役兩人也尤名札等は 大頭役所に認候事

一御臺場諸道具并自分道具漕運は船井地方傳道船三艘に積送候事

一立會之面々何も出張裝束之事

一留杭御幕串御長柄臺御旗臺自分武器臺桃灯竿少々は置付其趣は立會之節演説外に水溜桶白杵は石火矢打より木屋請取へ演説

一立會同役兩人は八挺小早に鍵船印指物建之事

一石火矢打は急用船へ乗組候事

一立會は佐嘉石火矢役其外名許左之通

長刀岩

高柳忠吉郎

嶺熊之助

江口壽平

高鉾

増田祐藏

嘉村孫太夫

蔭尾

小城源七郎

白崎

中野神右衛門
 澁谷忠兵衛
 生野次郎兵衛
 神代甚平
 中溝儀左衛門

右之外小役

○七月十四日御非番所請取之節は最前引渡之節立會候面々也然るに佐嘉
 左之名許之通名付遣候に付西川勘兵衛相加里長刀岩に立會候事

石火矢役頭

原次郎兵衛

石火矢役

堤文左衛門

長刀岩

同

白崎

番頭
 石田兵藏

石火矢役頭
 中野神右衛門

鐵砲頭
 澁谷忠兵衛

石火矢役
 生野次郎兵衛

同
 古賀權平

鐵砲頭
 田口庄左衛門
 澁谷忠兵衛

蔭尾

關市郎右衛門

古賀權平

田口庄左衛門

原次郎兵衛

鐵砲頭

納留又次郎

堤文左衛門

石田兵藏

高鉾

一イキリス船へ被下物左之通

一牛此所に豕二十疋被下 六疋付紙御許容無之

一薪 五千斤

一梨子西瓜等

一黃瓜 四十

一家鴨 四十羽

一蒔繪文庫 四付紙御許容無之

一水 三百荷

一鶏 四十羽

一南瓜 二十

一玉子 三百

一團扇但三色取交 十五本此分五十本被下

一杉丸太但長四丈廻一尺二寸 四本

一野菜類 五十斤

右諸色代銀爲御知可被下候已上

右之通願出候得共付紙之分は不被下候事

巳七月

弘化四年丁未七月下旬於長崎長戸岩御臺場清書

井上信元

嘉永六年癸丑

魯西亞船渡來增人數被差越記

井上權一郎聞書

嘉永六年癸丑長崎貳番々日記

○六月朔日大頭立花彌三太夫方々明後三日相達儀有之候條四ツ時役所
罷出候様達來候に付同日罷出候處壹番々當り前々面々相揃候上當長崎
一番番被差越候に付内用意仕候様御月番隼人殿被 仰聞候に付其心得
仕候様被申談候事

○同十九日彌三太夫方々同役頭取被申談候は貳番々被差越候面々旅用
金拜借之儀地方馬廻組七兩切扶三兩宛御貸渡に相成候然るに壹番々は
百石拾五兩之割に不拜借致出來候間取留有之向は此節も増拜借被

仰付候様大頭方伺に相成候處役成初る等之旅行に格別無據向は其次第委細申出候は、可被加御詮議且又右之通無據員數増之儀相願候節は大頭方も添横折指出に相成候様と之趣御本方御指圖に相成候由に候事

一右に付左之横折差出候事

口上覺

私儀當長崎貳番々被差越候に付内用意仕候様被 仰付奉畏候然處連々勝手向不如意仕候末之儀に旅用金及不足銀主之者に相談仕候得共唯今之折柄何分調達不致甚以難澁仕申候就右近頃奉恐入候得共金子三兩拜借被 仰付候様奉願候左候は、御蔭を以相仕廻難有仕合奉存候此段宜御執成奉願候已上

六月

名

大頭三人の當

○六月廿日彌三太夫方各事於長崎詰分其外申談儀有之候條明後廿二日四ツ時役所罷出候様達來
○同廿二日大頭役所へ出方同役掛之上彌三太夫方詰分請持割左之通被申談候事

高鉾新

西泊

吉田市 六

神崎三ノ増在來共

野間五右衛門

神崎新

原田直右衛門

神崎一ノ増

轟 徳太夫

神崎

同所二ノ増

〔本間源之進

高鉾在來

〔伴 次郎左衛門

同所一ノ増

藤田文右衛門

同所二ノ増

〔小川 佐平

蔭尾新

〔野間 又六

同所在來

大森圓太夫

長刀岩四ノ増

〔野間源次郎

高鉾

魚見岳一ノ増

〔杉 權右衛門

ス、レ

〔安部 孫七

魚見岳二ノ増

〔津田久一郎

太田尾

〔東郷孫一郎

白崎

〔井上權一郎

女神新古

飯永庄兵衛

魚見岳三ノ増

太田尾

魚見岳

〔飯永庄三郎

長刀岩一ノ増

〔長田半左衛門

同所二ノ増

高木仁太夫

同所在來

佐藤外衛

同所三ノ増

〔福島文四郎

長刀岩

一左之通彌三太夫方之達有之事

各事長崎貳番々内用意被 仰付置候通彌被指越候旨今日御月番隼人殿被 仰聞候尤七月廿三日乗船之筈に候其心得可有之候以上

六月廿二日

尙以左之面々今日御呼出に而長崎二番々御石火矢役代りとして被差越候旨御月番隼人殿被 仰聞候爲心得申入候以上
一彌三太夫方之長崎二番々御番手名付御用所へ指出置候間米銀證據勝手次第仕出候様且又先荷物品付目録來る廿六日限彌三太夫方手許に指出候様達來

一右に付今日左之通先荷致差出候事

先荷差出

一八ツは 米箱

一八俵は 石炭

一三ツは 漬物桶

一貳からは 筵包類

一壹ツは 油樽

年 月

名

立花彌三太夫殿

- 六月廿三日諸證據并請帳共認清水善藏の頼置候事
- 同廿四日未明愛宕參詣いたし候事
- 同廿六日對槍等からけ小簞筒片付米箱提燈籠致手入
- 同廿八日立花彌三太夫方を掛合來兼る相頼置候旅用金拜借之儀御本を杉山文左衛門殿御聞置に相成候旨横折御付書之儘掛合に封込來尤右爲御禮文左衛門殿御宅の罷出候様と之事に付翌日御禮に來候事
- 一同夕徳永貞七來二男幸次郎此節長崎爲後學召連吳候様頼來候に付致承知置候事

○同晦日 大頭役所の出方左之横折指出候處即日御聞濟之儀達來候事
口上覺

私儀當長崎貳番詰方被指越候旨被
仰付奉畏候就右忝保儀爲後學召連罷越私共請持筋每事爲見習置申度

奉存候此段宜御執成奉頼候已上

六月

大頭三人に當

一拜借金御聞濟に相成候に付左之通致差出候事

差出

拙者儀長崎貳番に加番爲詰方被指越候處旅用金及不足候に付金子三兩拜借之儀相願候處丑六月廿八日御本を杉山文左衛門殿御聞濟に相成候事

年月

名

立花彌三太夫殿

一夕清水善藏濟證據持参いたし候事

○七月朔日忝御扶持方證據請帳共認又々清水善藏の頼

- 一 長崎の御飛脚立に付西泊兩人魚見岳三人の書狀遣
- 一 大頭役所へ出方忤後學に召速度頼御月番隼人殿御開濟に相成候指出三編
- 一 左の御書寫大頭を頭取に被相達候由に廻狀來

大目付に

去る三日月夕刻相州浦賀表の異國船四艘致渡來一應糺に相成候處北ア
 メリカ國の船之由先穩に有之由に付右に付雜說等申立候儀有之間敷
 候得共右等之儀堅相慎み猥に雜說申觸候義無之様可相心得候尤長崎
 表并御領海急速請持之面々を初一統兼る被 仰出置候趣彌無油斷覺
 悟可仕候事

右之趣不差立可被相達候以上

六月晦日

○七月三日先荷積之儀達來例文故略之尤付紙有之左之通

是迄先荷物之内雜物薪炭等包立方籠相に有之歟にて御船方に而揚卸
 取扱方致難澁候間入念結立に相成度旨手筋を引合有之候事

七月十一日積

八幡丸 井上權一郎荷物 梶取 池 忠 太

○同四日 久佐久元服孫兵衛と改名願即日濟手數有之
 一 此節長崎召連候小者今日相極候事

松田忠太夫家來判

御笠郡上大利村 清 作

○五日夜中師萬六方に米證據持參且左之書付遺頼置

覺

- 一米六俵三斗八合は 御扶持方米
- 一同四俵壹斗九升七合は 御足米
- 一同貳俵貳斗五升五合は 忤御扶持方米

米拾四俵壹斗

内

六俵は 湊町加瀬屋丈七方

五俵は 唐人町八百屋吉次方

三俵壹斗は 拙者方

七月 名

○七月六日晝後小者召連加瀬屋丈七方へ先荷拵に行波奈石屋市次方へ行
石炭樫炭薪鹽等求からけ置

○同十一日先荷積に付小者召連湊町出浮加瀬屋下男加勢相頼左之通
柱倉出方無禮船頭へ引合八幡丸手明へ相渡候事

先荷目

一七ツは 大小米箱

一八俵は 石炭

一壹俵は 大俵樫炭

一壹俵は 鹽

一壹は 漬物桶

一壹からは 七輪二ツ

一壹からは (ほふるく
梅干壺)

一壹は 火鉢

一貳からは 三把結薪

九口外に書狀壹封

嘉永六年七月十一日 名

八幡丸梶取池忠太殿

同日直に小者召連紙役所へ行左之通致拜借且御浦役所溜り錢の内正錢
貳兩丈引替候儀兼る實父頼置候分今日紙一同に取寄候事

覺

- 一 貳匁八分八厘 かん皮指半紙六帖
- 一 三匁 半紙壹束
- 一 貳匁九分九厘 白半切百枚
- 一 壹匁八分 乙野半切百枚
- 一 三匁壹分五厘 半紙壹束
- 一 五匁七分 同貳束
- 一 五匁壹分 白方三束
- 一 壹匁四分 障子紙壹帳

一 貳拾六匁貳厘

一 拜借金證據は左之通兼而相認清水善藏の御救役所付方之儀迄相頼置候
處今日金子請取來候事

拙者儀長崎二番々加番爲詰方被指越候處旅用金及不足候に付依頼拜
借金請取申事

一金三兩は

嘉永六年七月

名

高屋佐次右衛門殿

岸原七太夫殿

- 七月十二日卯の日に付箱崎に致參詣候事歸幕掃除等相仕廻
- 同十三日中元遣物拂方等相仕廻候事委細日記に有之
- 同十五日未明八ッ比々悴連太宰府に致參詣候事
- 同十六日彌三太夫方左之通達來

別帳四冊相達候條被得其意早々被指廻來十三日限拙者手許に可被差
返候以上

付紙 本文之通相達置候處何方へ歟相濟居候と相見不都合之次第に候
今十四日和田市之丞殿に相達候條先々早々無遲滯被指廻來る十
九日限拙者手許に可被差返候以上

七月十五日

一於長崎御番所心得之次第并於浦津心得之次第略之
一於長崎火災之節出方割帳略之

於長崎平日住居割

西泊

聞次木屋

中の木屋

加番木屋

下の段木屋

壹番船

貳番船

岡部 簇

矢野市次郎

根來角兵衛

青柳良平

吉田市六

野間五右衛門

津田清太夫

松本五郎兵衛

三番船

四番船

五番船

四拾貳挺立

五拾挺立手作

四拾六挺立手作

空船

戸町

壹番木屋

二番木屋

白杵彌左衛門

因源七

木立藤次

淺香良吉

陶山源作

神田新五郎

板垣養永

原田源藏

小田傳三郎

三拾八挺立

松本六右衛門

野田清右衛門

三番木屋
 壹番船
 貳番船
 三番船
 四番船
 五番船
 四拾六挺立手作
 同
 四十六挺立
 三拾八挺立

中村甚五右衛門
 小川藤右衛門
 月瀬右馬允
 和田市之丞
 山崎三七
 茨木司
 伊勢田小四郎
 堀作太夫
 空船
 中山半八
 村上小十郎
 空船
 空船

御臺場々々詰分は前に記置候故爰に略す

長崎貳番々衆送り立御船組

多幸丸
 一五拾六挺立

神風丸
 一五拾挺立

飛雁丸
 一五拾挺立

小船頭 原田 源藏
 梶取三穂 惣七
 加藤又左衛門
 小船頭 中山 半八
 梶取岡村武右衛門
 郡 德左衛門
 小船頭 小田傳三郎

方圓丸
一五拾挺立

梶取上杉 武七
立花彌三太夫

好風丸

小船頭
村上小十郎
梶取上野 百八
櫛橋七十郎

一三拾六挺立

梶取秋山口木次郎

柳丸

津田清太夫

一三拾六挺立

梶取杉 專 五

廿三
市羽丸

月瀬右馬允

一貳拾六挺立

梶取福田 彦市
和田市之丞

鴻毛丸

梶取上田惣次郎

一五拾六挺立

岡部 簇

松本六右衛門

野田清右衛門

矢野市次郎

中村甚五右衛門

根來角兵衛

吉田市六

野間五右衛門

板垣 養 永

御足輕

百四十一

桂丸

一四拾六挺立

梶取中村 與吉

小川藤右衛門

青柳良平

安部孫七

東郷孫一郎

加徳丸

一五拾六挺立

梶取大塚 代作

伴次郎左衛門

長田半左衛門

野間又六

高木仁太夫

大森圓太夫

一五^五拾石小早

觀音丸

一五拾挺立

藤田文右衛門

佐藤外衛

小川佐平

福島文四郎

野間源次郎

梶取真隅 宅藏

松本五郎兵衛

梶取安永 熊平

原田直右衛門

杉權右衛門

轟德太夫

井上權一郎

千手丸
一五拾挺立

飯永左兵衛
本間源之進
津田久一郎
飯永庄三郎

梶取吉村 權吉
臼杵彌左衛門
木立藤次
因源七
山崎三七
伊勢田小四郎
堀作太夫
茨木司

一三^二拾石小早

陶山源作
神田神五郎
淺香良吉
梶取中村 幸七

一^{廿三}急用丸
但往來船中番頭衆用船

船付磯 吉

一^八六挺小早
中老用船

船付源 兵衛

御船數十六艘

○七月十六日大頭役所の出方之上左之横折指出候處無程御月番數馬殿御
聞置に相成候段彌三太夫方被相達尤徳永貞七にも昨日申合置候に付
今日双方差出候事

口上覺

私儀當長崎貳番々加番詰方被指越候旨被 仰付奉畏候然處徳永貞七
二男幸次郎儀爲後學私の差添遣度双方申合候此段宜御執成奉願候已
上

七月

名

大頭三人の當

一 歸路久佐家の寄候處同方を兼り願出に相成居候孫兵衛儀前髪執候得共
家業筋未熟に付長崎御番に被差越候も御用達仕間敷尤非常に付養祖
父彦左衛門被指越候節は爲後學自力を以罷越度且平常御番も同役申合
爲後學自力を以罷越度旨横折指出に相成居候處今日御月番數馬殿御聞
置に相成候趣掛合來候事

○ 同十七日明達具足箱玉藥箱等入組仕舞其外味噌桶漬物桶等からけ置候
事

一 明後十九日 御目見御料理頂戴被 仰付候に付麻上下用意に罷出候

様且前御禮之儀等彌三太夫方の御切紙相達候事

○ 七月十八日上下著用爲前御禮出方惣詰御帳に名許相記候事

一 同日荒戸邊の中通り博多春吉邊致廻勤暮方飯田角左衛門殿方の寄候處
長崎表の帆相見大早著之由に付唯今向家立花彌三太夫方へ聞に遣居候
趣噂有之候に付見合居候處未だ呼出は不參候得共風説承候に付仕舞次
第出方の覺悟之由返事有之候に付夜食仕舞直に引取居候處六町筋邊も
御用提灯烈敷致往來求殘し之物等買調通り町邊には諸役人追々出仕
之模様也

一 夕五ッ比歸宅直に 御館出方大頭衆の承候處白帆三艘相見候走り之注
進有之候に付今一左右次第に被差越候旨被申談陸路之面々は一刻も引
取相仕舞居候様と之事に付追々引取りは船路壹番に付暫く居殘候頭
取の致加勢久佐父子も出方有之

一 明日 御目見御料理頂戴御延引に相成候段大頭を被相達候事

一夕七ッ比 御館を引取候事

○同十九日早朝を荷物等大概相仕舞候事

一晝後 御館出方諸事同役申合等いたす

一米金鑑札御勘定所に渡方有之候に付請取書持參直に受取候様と之事

に付何れも請取に行鑑札二枚高左之通候事

一金貳兩は ○陸路之同役は金貳兩白米一俵壹升五合

一白米壹斗五升

○非常斗に被指越候向は金六兩三步二朱也

一陸路之面々は同役拾六人明朝出立被 仰付候に付 夕五ッ比 侍従様

御目見五ッ半比御月番御調相濟候事

一左之御書付寫を以彌三太夫方を被相達候事

中老 加藤又左衛門

大組頭 郡 徳左衛門

大頭 立花彌三太夫

馬廻頭 柳橋七十郎

於長崎今月十七日白帆五艘相見候注進相達候旨大澤豊後守殿被申聞候段言上之趣相達候其後之模様は未相達候得共右之通今度數艘之儀に付御詮議之上各初急速増御人數として被差越事に候御船々仕廻次第出船可有之候彼表著岸之上在番々頭中申合方萬端御手拔無之様可被取計候事

但陸路請持之向は明日出立急速被指越候條其心得有之手組之面々可被相達候事

一此節非常御船組荒増左之通乗主無之分は不寫多幸丸

一五拾六挺立

加藤又左衛門

御醫師

宮崎 養格

中島 見洞

信風丸

一五拾挺立

御醫師

郡 德左衛門

高田 玄桂

塚本 道禎

長生丸

一五拾六挺立

大組

山崎 權太夫

津田 清太夫

月瀬 右馬允

桂丸

一四拾六挺立

丹 半左衛門

蒔田 平太夫

御足輕頭

北國丸

一四拾貳挺立

小川 藤右衛門

青柳 良平

根來 角兵衛

飛雁丸

一五拾挺立

立花 彌三太夫

寶龜丸

一四拾六挺立

梶取 荻野平右衛門

傳達船貳艘

西川 吉郎左衛門

福島 兵藏

轟 德太夫

井上 權一郎

本間 源之進

好風丸

一三拾貳挺立

傳達船一艘

一八挺小早

千年丸

一五拾挺立

太田七右衛門

松尾又九郎

柴田直次

杉茂平

若松甚太夫

大筒組十二人

瀬戸兵八

山崎十藏○

神田新作

平野文之進

筒井藤太夫

草場傳太夫

△神吉六右衛門

藤井庄助

梅野源之丞○

岸原齊○

淺香了藏○

西川九十郎

中村三藏○

千田與平

清水平六○

山崎平太夫○

梅野團之丞○

松井幾平

伊勢田源太

一百四拾石

此船止み千年丸乗合になる

一貳百石

右同斷

一急用丸拾艘 一 二 三 五 六 九 十 十二 十三 十五

一六挺小早三艘 三 四 六

一四挺小早三艘 五 七 八

方圓丸

一五拾挺立

櫛橋七十郎

眞野元成

邦友元達

加徳丸

一五拾六挺立

御馬廻組

同 粟生十右衛門

同 山本直右衛門

同 八木 勲 負

同 島村九左衛門

日和丸
一三百石

御馬廻組

毛屋 司

同 小野 三 六

同 志賀 平 太

同 澤原 孫 作

同 魚住 奥 太 夫

巨盤丸

一三拾八挺立

同 西郷左馬丞
同 麻生與左衛門
同 山脇仁左衛門
同 縣 久右衛門
同 尾上新之丞

御足輕頭

矢野市次郎

中村甚五右衛門

立田丸

一貳拾挺立

御目付

和田市之丞

御船奉行

松本五郎兵衛

一五拾石小早

浮葉丸

一四拾貳挺立

末田喜太夫

桑原彌七郎

野間源次郎

福島文四郎

飯永庄三郎

一百〇五拾石積

但御筒貳拾挺玉藥臺敷板并假木屋取立入用諸品共積込

鴻毛丸

一五拾六挺立

大組

加藤九郎太郎

同 喜多村彌次右衛門

同 根本孫三郎

御醫師

有田正益

同 八田玉山

同 坂卷文碩

新宮丸

一四拾四挺立

御足輕頭

岡部 簇

松本六右衛門

萬歳丸

一四拾六挺立

御馬廻組

竹森安右衛門

伊藤次右衛門

同 平野茂平

同 伊丹三十郎

同 富永甚右衛門

同 森吉五郎

青龍丸

一四拾六挺立

御馬廻組

根本右一郎

同 龜岡傳藏

同 大島彌三郎

同 各務常次郎

同 松下傳右衛門

同 加藤彌平太

御馬廻組

長尾太平

三宅藤十郎

同

村井仁右衛門

都築九十郎

御馬廻組

野田新五左衛門

快通丸
一貳拾貳挺立

一羽丸
一貳拾六挺立
安永丸
一貳拾貳挺立

快風丸

一貳拾貳挺立

同 土屋喜八郎
同 粟生六兵衛

觀音丸

一五拾六挺立

御石火矢役
久佐彦左衛門

大筒役頭取
久佐孫兵衛

大筒役
臼杵彌左衛門

木立藤次

同 因源七

同 山崎三七

同 伊勢田小四郎

同 堀作太夫

山本兵右衛門

御船數百六拾六艘

香椎丸

一六拾貳挺立

同 茨木司
同 陶山源作
同 神田新五郎
同 淺井香了吉

播磨殿

中船頭宮

小船頭井

上本殿

飛電丸

一貳拾挺

久堅丸

一五拾六挺立

利用丸

一四拾四挺立

三左衛門殿

小船頭 百六十二
肥川作太夫

御船數三拾艘 但小船は略す

在番之面々

一大渡海船

一右同

中老 矢野六太夫
大頭 山内權之進
大組 山路嘉左衛門
馬廻頭 山彌左衛門
大組 毛利又右衛門
同 肥塚權之丞

四艘

右之内丸印之分は何れも八百石明神丸乗合に相成候事

一入夜彌三太夫方船路乗船は御船仕廻次第には候得共多く明後日に可相成明日は御目見有之心得に五ッ半比致出方候様被申談夕五半比引

取候事

一荷運町夫鑑札も今夕大頭役所に一一同御請取候事

一歸宅後實家に行今日見立之案内有之居候に付忝も暮方行

○七月廿日早朝飯後加瀬加平方の行金之鑑札正金振替之儀致相談米鑑札は中師方の持參宅の付來候様申談置候事

一五半比 御館出方跡聞指出等は例之通一紙に認指出候事

但跡聞は昨日中島惣吉の相頼是迄請持居候津田彌平次分も頼

一御目見は八ッ半比相濟無程御月番數馬殿に相謁御目見御禮は惣詰御帳に名許相記候事

一乗船刻限は九半過候方可然彌三太夫方被申談候事

一御到來所の消毒丸紫雪致拜借候事

一八ッ時比引取中島惣吉小池忠藏野田八左衛門加勢に來荷仕舞相濟

一夕近所其外村内之一族に暇乞頼旁行夫の鳥飼宮の致參詣始終忝も致同

道候事

○七月廿一日晴天

八幡宮御守貳ツ兼大宮司の頼置候分忰の請取に遣候事

一 早朝飯後小池忠藏の相頼町夫鑑札を以大工町淨念寺に立居候御町役所の遣す直様町夫五人來候内年長東町伊平と申者の荷目録を以引渡五人に三度持運其内荷之番は長屋之者の申付置四ツ過迄に荷物運方相濟荷目録は控共貳枚遣候事

一 正九ツ比忰并徳永幸次郎召連主從四人出立一族等見立に來る久佐家の誘引候處未だ出立に不相成候間波止場の弟遣寶龜丸の問合候處今少見合致乗船吳候様と之事に候得共柱倉出方之御陸士目著到には追々付居候趣に付久佐の先に行著到に付候る曾根屋利助方へ暫時見合居候處御船方最早宜由爲知候に付直に寶龜丸致乗船轟徳太夫一人乗込居候處跡之面々隙取候に付徳太夫申合船中用炭薪七りん等家頼の爲控追々乗

合之面々乗船に相成候に付乗船相濟候由立花彌三太夫方乗船迄家來傳道に乗遣候事

一夕四ツ比座直り無出船九ツ比志賀島着船

○七月廿二日晴天朝七ツ比志賀出船順風に晝比呼子沖致通船八ツ半比平戸通船午ヶ首に暮夕四ツ比面高著

○同廿三日曇天晝比小雨朝七ツ比出船六ツ時板ノ浦著船九ツ頃船々出船致し掛り候得共模様悪敷故か相止同所滯船

一 板浦に立花彌三太夫方乗合西川吉郎左衛門呼に來候に付直に出浮候處先刻長崎表の飛船差立に相成候處先穩之模様に高鉾神崎之間に卸碇居候に付神島に手組々々船列立行儀に乗込候様と之事に付早速手明呼出右之趣申談候事

但何れ之御船にも同様頭々達有之候由に候事

一同所に松尾又九郎來同人乗合柴田直次家頼昨日東風異體之容體に

付縛り付居候由に毎事相談に來候に付早速御醫師へ爲見彌三太夫方
にも其趣一應相嘶可然申合無程有田正益へ爲見候由の處至る手強き病
發之由に眠り候丸藥遣し決る縛りを免し申間敷油斷不致候様申候由
彌三太夫方方も長崎著之上如何様共指返候都合可致先油斷無之様重疊
可被申談候由に候事

一板浦に左之通彌三太夫方御足輕頭御石火矢役大筒役の達來

別紙兩通於御國許御月番數馬殿を被相達候則相達候條被得其意先々
無遲滯被差廻留分可被差返候以上

七月廿三日

中老 加藤又左衛門
大組頭 郡 德左衛門
大頭 立花彌三太夫
馬廻頭 榎橋七十郎

各事此節長崎表に急速被差越儀には候得共兼る貳番々被 仰付置候内
交代之時節にも相成候事故異船之趣次第には各初惣御番手中貳番々被
仰付置候輩は一番々交代直に在番之心得に可被罷越候交代之都合等
は尙於長崎播磨に申出得指圖可被申候右之趣惣御番手中各分可被相
達候事

於長崎一昨十八日大澤豊後守殿を桐山市郎太夫御呼出に白帆船四艘
追々湊近く乗寄來候大船貳艘小船貳艘に橋に日本假名文字を以おろ
しや國と記候旗を揚候由沖出役之者分申越候右に付多く今日中高銚近
邊に卸碇候様可相成候間御手間向猶又嚴重有之度若又仕切船へ乗掛候
哉或は上陸可致體に候は、可相成丈手振等に相支の不致動搖穩便に
取計容易に矢業等施間敷尤彼等分不法之義いたし候は、出役分及差圖
にて可有之旨用人を以被相達候間早速御番頭中及通達同夜又々御呼

出に於今度は諸家類役一同罷出候處大澤豊後守殿被致對面今十八日異國船四艘渡來に付相糺候處魯西亞船に於書類を持參乘渡候旨申立且類船無之外疑敷儀相聞不申候段御書付被相渡候段及言上候此段爲心得相達候事

惣御番手中にも可被相達候已上

○七月廿四日曇天東風強漸々和朝六ツ比板浦出船暫時披き後押船九ツ比神島著船

- 一早速御舟飾有之候事
- 一御非番所も佐嘉御人數未相揃候由に於此方様御飾有之居候事
- 一乗合西川福島高銚を呼に來候に付具足下陣羽織に於揚陸有之
- 一壹番々大頭山内權之進方は高銚指口に於常住木屋住居隣木屋陸路被差越候同役に於内原田助太夫長田半左衛門高木仁太夫佐藤外衛且一番々頭取

津田武右衛門致住居其外壹番々同役井上庄左衛門安川榮栗原與八郎は在來侍番所住居假木屋も二軒立御足輕山内家來共住居候事但彌三太夫方も高銚繫船に候事

一右に於外陸路被指越候同役神崎野間又六飯永庄兵衛大森圓太夫小川佐平長刀岩に吉田市六伴次郎左衛門藤田文右衛門野間五右衛門蔭尾に杉權右衛門安部孫七津田久一郎東郷孫一郎住居候事

一拙者共乗船寶龜丸は高銚下に於繫船居候様とに事に於候事
一明廿五日播磨殿兩御番所を女神魚見岳白崎長刀蔭尾高銚神崎太田尾ス、レと順道に於巡見に於付寶龜丸乘候面々は高銚に於出方候様彌三太夫方に於申談候旨頭取を尊有之尤西川は女神魚見岳白崎福島は神崎太田尾ス、レ付廻に於候事

○七月廿五日早朝を西川浦船に於女神に於渡海福島も見合渡海殘四人晝飯後高銚揚に於貳の増に於出方無程播磨殿三左衛門殿御同道にて巡見有之

其外付廻り御用聞加藤三郎左衛門役原静馬御祐筆大野平内江藤小一郎等御用所下番上野右内も参居候事

一夜中御臺場見廻りに申合上り候様と之事に付圖取いたし太田轟今夕揚り高鉾に致一宿候事

一巡見後神崎矢野六太夫殿居木屋に御番頭乗寄合有之内役頭取中も出方夜半過引取に相成候事

一佐嘉御人數相揃候付明日御非番所請取度旨申來候由に付兼御示談も有之居候旨に付長刀岩蔭尾白崎魚見岳可相渡被申越候得共佐嘉よりは御非番所不殘と申立候由に付速に評議有之明日之請取後は出來いたす間敷趣に候事

一異船四艘之内小形蒸氣船は本國の限り御用事有之明朝致出帆度旨申出候由御奉行所番頭衆にも達來候由に候事

一夕八ッ過高鉾を乗合何れも呼に來尤西川は蔭尾へ出浮に相成未明に蒸

氣船出帆之由に付自然之節之ため何れも御臺場々々の致出張

○七月廿六日晴天和氣

一朝六ッ半比を蒸氣船に煙相見五ッ比出船帆なし蒸氣計に御出る大船を

一遍周り直に走る至る速也朝辨當取寄二ノ増に御相仕廻伊王島かはし候に付見合引取候事

一夕本間源之進同道に御高鉾の揚る一宿掛御臺廻り夜半過請持致廻方候事

一御非番所請取渡之儀佐嘉御方と趣意違に相成居候由に御彼是之内には隙取事に付佐嘉を申立候通御非番所不殘明日御渡に相成由乍併異船間近き事に付穩に致度夜に入候方可然双方申合に相成候由に候事

一予逆上強頭痛齒痛等致候間高鉾居住有田正益を爲見齒脛を血取灸點頸に三ッ御高鉾に御悴はすへさせ候事

一夕左之通彌三太方を達來

今度魯西亞渡來に付

侍從様一昨廿四日 御發駕被遊 御越座候旨被 仰出候明廿七日此
元 御著之御日割に有之候條翌廿八日兩御番所初御臺場々々 御巡
見可被遊候先不殘御上陸之處可被心得候船岡住居之面々御巡見之節
々所々々波戸出方可有之候以上

七月廿六日

一御非番所佐嘉に相渡候後同役住居割左之通評決に相成候事

西泊

吉田吉六、
野間五右衛門、
壹番々 田隅六七郎、
同 末田作之進、
壹番々 田隅六右衛門、
原田直右衛門、
神崎

依申合神崎へ上り住居
非常計り
神崎下繫船
浮葉丸 非常計

同
同
同
好風丸 同

森 徳太夫、
本間源之進、
横田惣六岩
西川吉郎左衛門、
桑原彌七郎船
末田喜太夫船
杉 茂平岩
松尾又九郎岩
柴田直次岩
壹番々 村澤喜三太、
壹番々 梶原八太夫ス
同 藤井利左衛門、
西川甚之丞、

太田尾

魚見岳に繫船
寶龜丸

杉 權右衛門、
 安部 孫 七戸
 津田 久一郎戸
 東郷 孫 一郎、
 壹番々
 津田 武右衛門、
 同
 井上 庄左衛門 太
 同
 安 川 榮太
 伴 次郎左衛門 神
 藤田 文右衛門 神
 小 川 佐 平 神
 壹番々
 栗原 與八郎 太
 非常計り
 福 島 兵 藏 太
 同
 太田 七右衛門 太

女神

魚見岳

同
 久佐 彦右衛門 太
 同
 久佐 孫 兵衛 太
 壹番々
 齋 藤 太七郎
 同
 大 西 諸 平
 同
 太田 啓次郎
 井上 權 一郎
 飯 永 庄 兵衛
 飯 永 庄 三郎
 壹番々
 吉崎 清右衛門
 同
 阿部 專之丞
 同
 津田 孫 平次
 野 間 又 六
 大森 圓 太夫

女神

野間源次郎
 壹番々 大森與左衛門船
 同 櫻井文之丞同
 同 根中保兵衛同
 同 櫻井源十郎同
 長田半左衛門
 高木仁太夫岩
 佐藤外衛同
 福島文四郎

一 乗合不殘高鉾の揚今夕御非番所佐嘉の渡方に付御道具類取片付其外同
 役荷物片付等之致加勢御道具類は御雇ひ船に於戸町御道具倉へ爲運同
 役荷物はケ所々々の漕送らせ七半比引取候事
 一 侍從様 御巡見廿九日に相成候段彌三太夫方々達來

一 御非番所請取渡之節佐嘉方立會名元左之通に候事

白崎

番頭 鍋島隼人

石火矢役頭 原次郎兵衛

鐵砲大頭 伊藤次郎左衛門

石火矢役 東島三太夫

同 大坪藤吉

同 大木次兵衛

同 水町郡之助

右 兩入

石火矢役 東島三太夫

同 大坪藤吉

高鉾

蔭尾

長刀岩

一 此方立會名許左之通に候事

鐵砲大頭 山内權之進

白崎

足輕頭 渡邊和平

同 石川新五郎

石火矢役頭取 津田武右衛門

石火矢役 大西請平

石火矢役 大森與左衛門

長刀岩

同 櫻井文之丞

蔭尾

同 吉崎清右衛門

同 阿部專之丞

高鉾

同 井上庄左衛門

同 安川榮

一西川吉郎左衛門二男忠五郎福島兵藏二男小太郎拙者忝保外に太田七右衛門小者右四人高鉾同役今夕佐嘉立會之節貸遣す

一夕五ッ比佐嘉衆船々白崎高鉾來請取渡相濟候に付見合神崎下へ乗

込候事

一夕彌三太夫方左之通達來

侍從様今廿七日 御着明廿八日沖 御巡見之旨相達置候得共明後廿

九日沖 御巡見被遊候旨申來候被得其意昨日相達置候通可被相心得

候以上

一夜中怪敷儀有之如何之事に候哉何れ夢中におそわれ候哉船々に一同おらび出し一向譯も相分らす都合三度右之通誠に鯨波之聲と謂つへし乗船寶龜丸之水夫も同様に付大に叱り付何方も浦人計と相見候事
但一二夜跡地方も右之都合に船々おらひ出し候由御座船二艘は平常之由今日噂候事

○七月廿八日早朝徳太夫源之進荷物共は神崎の揚る吉郎左衛門も同所に住居之儀申合是亦荷物共に揚り候事

一夫を直に魚見岳下へ乗廻拙者荷物共に致揚陸常住木屋には壹番々大組

頭山路嘉左衛門方住居に相成假木屋貳軒專取立中に付暫時石火矢打常住木屋の見合居候處無程致出來候に付直に荷物等爲入致居住常住木屋椽先壹軒は二間に石段の上水堀前壹軒は二間に也小き方に同役六人住居之心得也大き方に足輕頭兩人足輕四十人之積也未た住居割之達は無之候得共此折柄之儀に付不取敢同役申合嘉左衛門方には其趣申出置候事

一 嘉左衛門方御木屋の參致面會無程飯永庄兵衛父子も上り來候事

一 侍從様明廿九日沖 御巡見之筈に候處依御都合今日九ツ時兩御番所計

御巡見被遊御臺場々々は御名代久太夫殿被指越候趣其外出方場所等之

儀嘉左衛門方被申談候事

一 晝飯後 侍從様兩番所 御出之模様も波戸致出方西泊方戸町

の 御出之節御禮申上見合引取魚見岳御柵内之筈に候得共人數多候間

二ノ増口に罷出居候處無程久太夫殿女神の間道通御出嘉左衛門方居木

屋に於暫時休息夫々二ノ増計御出に於暫く異船之模様等見分有之兵藏惣六御付廻いたす當所波止出方左之通

常住木屋住居

山路嘉左衛門

當所下繫船 引入

喜多村彌次郎右衛門

同

加藤九郎太郎

同

根本孫三郎

假木屋住居

三好策藏

假木屋住居

白石七右衛門

當所下繫船

福島兵藏

同

久佐彦左衛門

同

久佐孫兵衛

同

太田七右衛門

女神假木屋住居

野間又六

當所假木屋住居
同
女神假木屋住居
同
當所假木屋住居
同
同
女神假木屋住居
同
同
大組頭乘舟住居
同

井上權一郎
飯永庄兵衛
大森圓太夫
吉崎清右衛門
大西諸平
太田啓次郎
齋藤太七郎
阿部專之丞
津田孫平次
野間源次郎
八田玉仙
坂卷文碩

但何れも出張装束之儘に候事

一夕山内權之進方々左之通達來魚見岳女神詰足輕頭同役に當
各事出張中住居繰之儀別紙之通相成候條其心得可有之候以上
七月廿八日

魚見岳

大組頭

(石火矢打八人
陰尾之八人共)

一上常住木屋
一下常住木屋
一下假木屋
一上假木屋

御足輕頭二人
御石火役六人
御足輕 四十人

女神

新臺場

一侍番所
一 小番所

御石火矢役八人

一 建次假木屋

一小番所

一 假木屋 二間
五間

在來

一 侍番所

一 道具木屋

一 假木屋 二間
八間

石火矢打

御石火矢役六人

御馬廻頭

御足輕頭二人

御足輕四十人

一 右之通達來候得共最早上假木屋之住居込居候間御足輕頭の問合指支無之候は、内操之儀に付如何様共可相成及相談候處同方も手許さへ指支無之候は、互に住居候事に付唯今之通下假木屋へ御足輕頭二人御足輕四十人相住居可申と之事に付其趣嘉左衛門方致噂候處此折柄之儀に付如何様共都合宜申合候は、苦かる間敷旨被申談候事

一 彌三太夫方權之進方連名に在左之通達來

魯西亞船四艘之内運送船一艘明日致歸帆候旨 御奉行所を聞役御呼出に在被相達候旨播磨殿を被相達候爲心得相達候以上

七月廿八日

右之都合に付石火矢打頭取宗利專五にも申談且又自然之節之ため明早朝御筒每玉藥等配付之儀申談置候事
一夜中も交る々々御臺場内見廻候事
但夕々之儀に付以後不記之

○七月廿九日朝飯後嘉左衛門方初何も貳ノ増の致出張五半過運送船致出帆候に付見合引拂候事

一 先荷船八幡丸を荷揚之義問合來候に付先預け置此方を能き比及通達可申且又事欠候品は内取致度儀も申談置候事

一 嘉左衛門方何も參候様使來候に付相揃參候處此節 侍從様を頂戴之

御酒御肴披有之船住居大組衆其外御足輕頭同役も呼寄有之御同人陣羽
織に於一順酌有之相祝候事
一兵藏方御臺場請持割左之通に申合候様申談候事

壹番々 齋藤太七郎

同 大西 諸平

同 太田啓次郎

同 井上權一郎

同 飯永庄兵衛

同 飯永庄三郎

同 福島文四郎

同 吉崎清右衛門

同 阿部專之丞

同 津田孫平次

壹ノ増

貳ノ増

三ノ増

女神新古

貳番々 野間 又六
貳番々 大森圓太夫
同 野間源次郎

寶龜丸乗合

同 福島兵藏

同 太田七右衛門

同 久佐彦左衛門

同 久佐孫兵衛

壹番々 大森與左衛門

同 櫻井文之丞

同 根中保兵衛

同 櫻井源十郎

貳番々 長田半左衛門